

515
119

人
類
之
本

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

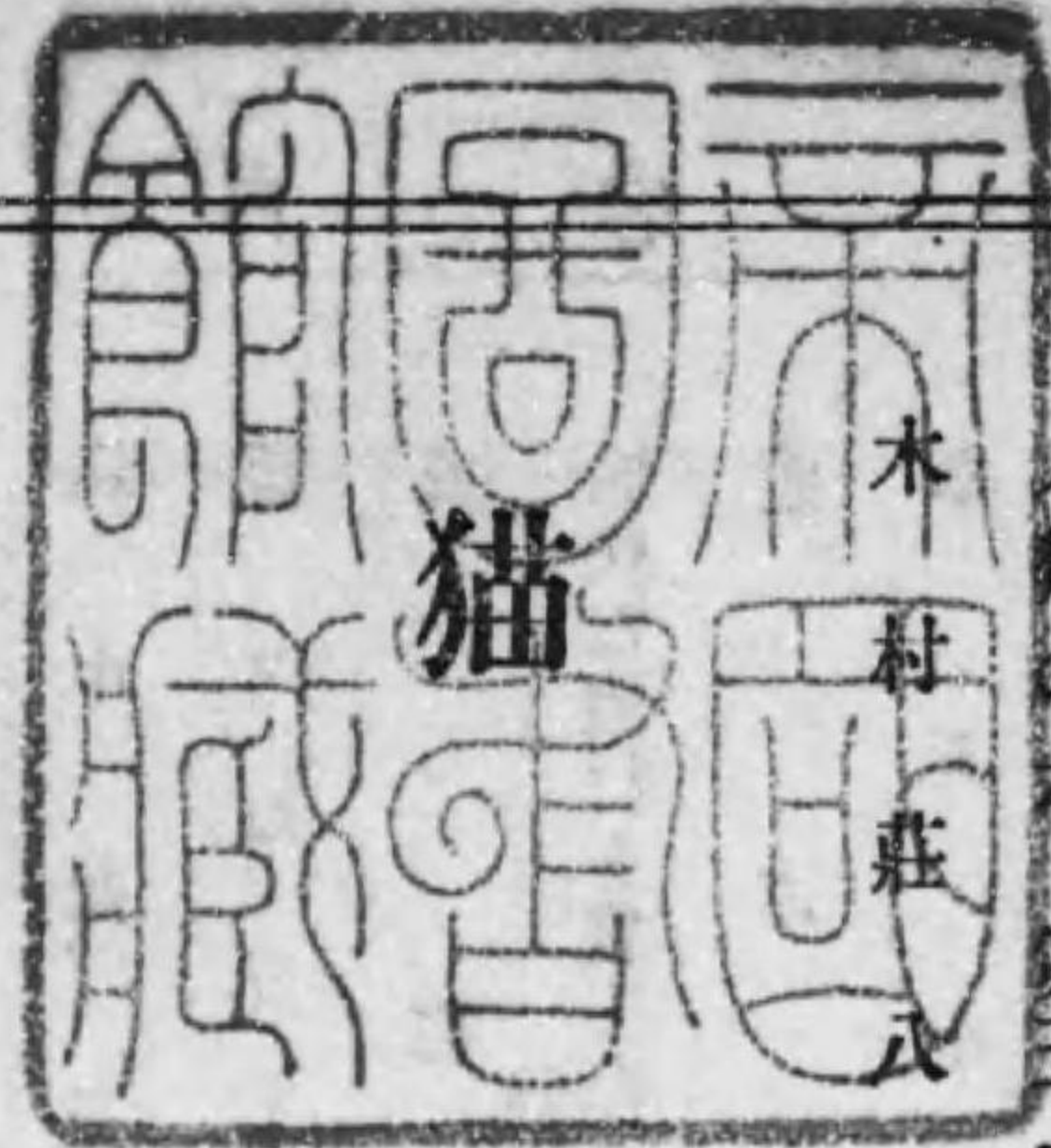
始



1049

✓





人願の本 第五 [小説戯曲篇]
木村莊八
小品選集

新しき村出版部刊行

大正
13. 4. 24
内交

木村莊八

575-119



内容

奉	遊	愉快な旅行と當てなき散歩	或	要	病	猫
天	ぶ		る	ら	中	
小			町	ぬ	記	
觀	會		筋	買	三	
				もの	稿	
(一六五)	(一一五)	(八九)	(八五)	(七一)	(四五)	(三)

「上」渠の生活

私の家には今猫が三匹ありますが家の近所は大てい猫ざらひばかりで、困ります。隣りの家は綺麗すきなので猫が厭ひです。前の家には鶏がゐるので猫が厭ひです。只家から十五六軒離れたところに、靴屋がある。その夫婦が犬猫すきで犬が二匹、猫が一匹ゐます。そこはさすが好きでせうが一度、四年ばかり前に、家の豊樂といふ子猫が一週間以上見えなくなつて、心配したことがあります。するとはからず靴屋にゐたので、却て好きも善し悪しのことがあります。

此の頃その靴屋の白猫が、夕方になると家の臺所へ来て鳴いてゐる。尤もよく方々その邊をいつも歩いてはゐるのですが、此の間一度、フト出来心で抱いたらおとなしいのでそのまゝ家に入れて飯を食はせたことがあるのです。それから二三度来て飯をやりましたが、それがくせになつて此度は毎日やつて来て鳴く。野良猫なら鳴きません。人間の愛情を知つてゐるので鳴くのです。靴屋でも充分飯は食ふのでせうが、又他の家の飯は變にうまいのか。人間にもそんなことがある。何しろ家のおかゝの飯を食ひに、催促しに来る。で悠々とコセくせず——それが又可愛い、

——食事して、暫くその邊にねてゐたり、化粧したり、それから何時か歸ります。然し又あくる日いゝかけんの頃来る。

それはいゝが、只之れが餘り毎日くせになると、自分の家よりこつちへばかり度々来る様では困ると思ひます。先の豊樂もそんな事で靴屋へ行つてゐたのかも知れませんが。その時には、然してつきり取つたのだと思つて弟が半分怒つて取り返して来たのです。それ以來私も向ふも變で、靴の直しもついあすこへは頼まず買ひもしません。——

その豊樂は非常に綺麗な猫でした。靴屋の白猫は目が悪く、極く平凡なよくある猫だが愛情は又別だ。靴屋と家とは、猫では一種前例があるから再びそれを（此度は逆に）くり返すのは困る。それで、今日はわざと彼を追ひ返して飯はやりませんでした。何だかいぢらしく、氣の毒だつたが、飼主の感じがあることなので。

私は先に、^{チヨウゲ}鳥毛と云ふ白猫を飼つてゐましたがその頃右隣りの家は、まだ若夫婦新婚の當時で今の子供がゐらず、何と云ふことなく家の鳥毛を可愛がつてゐました。又猫がさうなるとのんきでゐる他は大てい隣にゐて、夕方私達が家中外出するので戸締めにするとなぎ時々あります。鳥毛がその時見えな。然し二階に切り穴があるからはいれるだらう、飯はいつもの所に作つてあ

るから、位るに思つて、家の横町を出やうとすると、つい隣りの家の内部が見えます。見ると若夫婦食事の膳のわきに、ちやんと鳥毛の奴が座り込んでゐる。「フム、すつかり間違へてやがる」。勝手にしやがれの氣が一瞬します。——みすく、人にその感を抱かせるのはよくないし、猫が可愛想だ。之れで半月ばかり靴屋の猫は毎日來てゐて、とう／＼困りました。

家の猫は、その靴屋のタマとは多分外では前から知り合の筈です。が初めてタマが家へはいつた時のこと、タマがはいちやうへ上つて食器で飯を食べてゐると、家のは三匹そのそばへ遠まきに集まつてうろんに不快氣に見てゐます。それを尻をおしてタマのそばへ一寸近づけてやると、クワ、と口を開き鼻に皺をよせ、鼻にふんばつて險相に怒る。極く意地悪るな同族にあるまじき感がします。之れが知り合で、探しても近所に十匹とはゐない同じ仲間とはとても思へない譯した邪険さです。然しそれも二三日するとあとは來ても平氣になつた様でしたが、こいつは自分に生活上にも肉體上にも害は與へぬと見極める迄は假令親子でも兄弟でも、初めは互ひに怪しむのです。それが生活の必要でせうが、必要以上に一體猫はさう出來てゐて、淺ましい氣がする。餘りに性格が濃くさう作られすぎてゐる。

人は十人に六人猫を厭ふが、ここ——少くも此の種の性格味から來るのだらうと思ひます。私

は辯護をする。それは猫の出來で、玉なら玉、白なら白がするのではありません。個體は無邪氣なのだが總體が有邪氣的に、損に出來てゐます。その點極く露骨で、然し彼等は又ちつともそれを知らないのだから氣の毒です。彼等が自然彼等で厭はれる。彼等の生來がするのですからもしそれが憎ければ、彼等は哀れな動物です。さう淺ましく寂しく出來てゐる因果な性です。釋迦のねはんに猫だけくやみに行かなかつたと云ひますが昔の人は、有り相な可哀想なことを考へると思ふ。犬なら早速出かけたでせう。否、出かけたと人に云はせたでせう。さう云ふ得な性格がある。

それが猫の方は、あいつだけは如何さま行かなかつたと云はれる方がさうしてもびつたりし相に出來てゐます。行かないで後世に汚名を残すことなきには平氣でのんきにねてゐたか、イヤ寧ろその時に限つて、折り悪しくうまいものにも引か、つてみすく、汚名を残す機に知らずにゐた。さうなる様に一體宿命的に不運に出來てゐる……

然し又その「不名譽」を猫があとから氣が付いて知つたとしても、もしもそれが犬なら失策を嘆いて後れ走せにも釋迦の墓へ出かけて、揃つて遠吠へ位したかも知れない、それを猫の方は、別にしまつたとも思はなければ嘆きもしない、世に不名譽もそれこそ名譽もなく自分の生身いみだだけ有

つて他には何にもなく、同族さへ若しなればなく、相變らず眞面目な陰氣な顔をしてゐるに違ひない。「妾はかう云ふ生物だ。イヤがられても仕方ない。何しろかうして生きてゐるのだから仕方ない。」——とも言はず、全く、そこ等が然し猫の身上で、一種善惡以上の寂しい愛情なり悲哀を與へる。

彼は中々人間の眼を正視しません。いかに馴れた猫でもその顔を引きよせてまともに見るとイヤ相に視線をよけ、そらして下ふ。そこに感じがある。素描のメまつた眞面目な冷徹な彼の表情！ 遠い星の様な悲しい静けさ。

猫には何か哲學のユニツクな、狭いが深遠な一理があるかも知れません。生があると云ふ一番簡單な意識以上の事實が。その事實を最も有効に露骨に態度でも表情でも性格でも生活でも表示する彼獨特の演繹以上、直接法の道が。

彼は餘りに簡單なので却つて奥行きや何か秘密でも影にあり相に怪し氣に見られます。猫を女によく例へるが簡單な公明すぎて却つて變に不思議な點で、似てゐます。昔からよく化けたり祟つたり小判をくはへて來たり、そんな怪しい傳説が彼にはあるが、私には然し時に、考へられませんが、彼は死んで了へば只死んで了ふし生きてゐれば又只生きてゐる、極く淡々たる——故に神

秘のものです。然しその感が往々餘りに公明で變に事實的、數理的なので稍もすると猫には詩がなくなつて、一所にゐても生活の交らぬ瞬間が度々あります。何だ、コイツゐたのか！と云つた感じですよ。

私は度々夜ふかしをするので家中ねて了つて私一人だけ、二階に起きてゐることが屢々ある。そんな時には、猫も好んで二階へ來ます。足音もせず氣合もせずにフツとやつて來て、いきなり背中へ上られて驚くことなきある。然し「畜生！ 來たな」と思ふと愛情が湧きます。で、抱いてやらうと思ふ。然しさう思ふ時分には、又足音も氣合ひもなくフツと何處かへ行つて了つて、影も形ちもありません。變に怖くなる、全く。あの足音のまるで無いのが何と特別の感でせう。鼠をとるに必要と云へば説明は片付くが片付かないのは、そこから如何しても生れたがる怪談、傳説の色合ひの濃さです。闇で音もなく眼ばかり光らせてゐる時なき、思はず突然見るとぢかに魔性に思ふ。

ところがその暗闇から引き出して彼の體をよく見ると、まるでエムブテイーで、そのエゴイストなふてぶてしい様は世に典型となる程です。こつちが暑くて仕方ない時なき、ノサノサ膝へ乗り込んで來て下ろしても下ろしてもいつかな退かない。ねほけた無愛想な、空寂な眞剣な顔をして

からだをうねらせ、「君はうるさくても俺はねむいのだからまあねかせろよ」と云つた工合ひに又ものつそり入り込んで来る。その圖々しく権利主張氣な動物々の感じ。彼は私を信じてゐるかからさうするのだが、信じたからには又日の當つた縁がはと人間と同じに扱ふ露骨さだから、やり切れない。こつちも遠慮なく退けて氣の毒でない權利氣を感じます。

が、結局退けられたとなると此度はそれを恨みも悲しみもせず、平然枯淡としてゐる。その無氣力な悲しい消極さ！ まあ仕方ない、こゝでねやうと云ひた氣に、あきらめて、机のはじつこで丸くねたりする。可愛さうになるではないか。で親切に抱く氣になる。が、すると又素直には中々云ふことを聞かない。へんなけつまがり。おかしいが時々いやになり、愛想がつかます。何と孤立に出来てゐるやがる！

ツルゲネーフの詩に、犬と雷鳴の日一緒にゐて思ひの融けるシーンがありますが、あの種の共存は猫だと少ないかも知れません。先きが先きならこつちもこつち、とよく云ふが、一體猫の方で自家一家主義ばかりかざして來るのでこつちも牽かれて、自家一家主義になる。

さう云ふ動物はよくない。十二支にはさすが除けられるかも知れませんが。世に猫の年があつたら何も彼も偶然か利益同志かでなしには折りは合はず、結婚なき殊に變にまとまらず、弱るかも知

れない。——然しそんな惡口をつひ云つても、當の猫の方では一切平氣で全く自然に、サバサバしてゐるのだから、云はゞ張合なくなり、大人氣なくなる。かう云ふ生活もあるよ、と云ふ風です。成程ある。その味が又頗る獨自である。何と餘程不思議な頭の時の造物主の試作だ！ それが又さうして中々深く、進んで出来てゐるので、つひ感心して猫黨になります。

私の家の猫は、女三毛の天弦てんせんとその子の男三毛のビィ、それと此の春生れたビィの弟の眞黒な名なしとゐるのです。黒猫もそろ／＼名をつけないといけない時分ですが何としたらいゝか、よくつけるチャンは牡猫には不向きだし、私の弟はビィ天と呼ぶし妻は黒と云ひ、私はチビと云つてゐます。まだ名を聞きわけて返事をするには至らない。それでももう天弦のとつて來た鼠を二匹、食つた様ですが。

諸君は猫の愛情を知つてゐますか。鳩に三枝の禮あれば猫にはこんな慈愛があります。母の天弦はよく鼠をとる。殊に子供がゐるとせつせと遠出をして、とつてくはへて來ます。トン、トン、とそれが二階の階段を外から歸つて下りて來ると、下の室の子猫は待ちかまへて障子の切り穴から段下へ飛び出し、母を迎へる。でそこで母から鼠を買ひます。然も子供の分相應にさうしてさかすか、小さい鼠を選つて持つて來ます。

母はその始終ゴロゴロの音を鳴らしてさも可愛げに鳴き、鼠をくはへてウーウーなる子供をなめてやり、それから自分は別に食器に向つて飯を食ふのです。子供を教育するか、愛する意志としか無論見えません。さすが母性に尊敬心が湧きます。

一度残らず生れた子猫を厄介故少し置いてすぐ、捨てたことがあります。すると或る晩のこと、その日は雨ふりで鬱してビショビショしてゐましたが母猫がトン、トン、階段を下りて来た。濡れて寒さうに下りて来ました。そしてグリーンと云ふ一種の子を呼ぶ聲を出して、下の室へ来た。口に一寸位の裸鼠をくはへて。

彼女は鼠を放してそこへ置き、まん丸な目をして、方々見てゐる。グルンニヤー、グルンニヤーと細く尻上りに、さもさも可愛げに呼ぶのです。子を。私はごうしやうかと思ひました。——しばらくさうして探してゐましたが、しまひにあきらめて、しよんほり鼠を見てゐました。が、ムシヤリと殆んき一口か二口に、食べて了つた。

子供には大變な土産だが母には何でもない。噛む間もない鼠だ。それを何所からかせつせとつて来た。わざわざもつて来た。雨の中を。私は氣の毒なすまない氣がした。それ以來、子は一匹は必ず相當になるまで、とつておいてやります。——ところが、畜生のあさましさか、それが

天性か、恐らく天性で寧ろ自然の情けでせうが、——彼等にさう長く母子の情があつたら猫はどれも之れも嘆いて暮すはか無いわけですから。——子供が相當に大きくなると、一時甚だしく親が厭つてひさい目に合せます。

子の方は無邪氣にコロリと引くり返つてふざけて親の足にからみついたりするのですが、見る／＼親の方では爪をむき出して子を掻き飛ばすことなごある。本氣に。子猫は悲鳴を上げ、逃げてはじつこに小さく丸まり、驚き、がっかりしてゐる。それから大ていねて了ひます。可哀想に。猫は苦痛に出逢ふとねて癒すのです。餘程そんな時親の方では成長しかけた子が憎いらしい。

イヤ然し人間でも十六七の成人しかけた大人子供は満更いゝ感じばかりではないかも知れぬ。尤も、その一時期がすぎると、親子は又無事に和合しますが。然し元とは態度が違ひます。いつ離れてももういゝ愛情の仕度は、出来たらしい。哀別離苦の生きがせは外れたと云ふ形ちです。親猫子猫よりも大猫小猫になる。

で小猫の方の男は大猫の女(親)に、——書く迄もなく、その時期が来ると矢庭に首筋へ食ひ付くことなごあります。

親子のけじめより生殖の方が猫の世界には大道で、親子、夫婦の情誼以上、猫は性慾争闘をし

ます。勝てば誰とでも夫婦になる。異性と夫婦になるのでその異性には、親も兄弟も曰くはない。それも、個性がやるより総體です。彼等は驅られて或る期間努力以上の努力をします。ぐたくに疲れる。全く一事業です。猫に生れた定め。——牡猫牝猫の精に憑かれた身軽な泣きわめく毛ものが魂即生殖慾で奔闘するのですから、變な月夜なき、おめき叫んでガリガリトタン屋根から轉がり落ちたり、近所迷惑なことがある。

此の春の或る日のことです。私の妻が大三毛のビー助をしきりに叱つて、「イヤな猫だ、本當にイヤな猫だ」と云つてゐる。ビー助は閉口して片わきにうづくまり、耳を伏せてゐます。

「さうしたんだ？」

「このビーは馬鹿でねえ」とビーをころがして、「仕様がな。イヤな猫だ！」

「何だ？ 何かとつたのか？」

「いゝえ、さうぢやない。天弦さん(母)の首筋へ食ひ付いて今大變なさはぎ」

「仕様のない奴だな」と私もさすが撃墜しました。

ところが彼(ビー)は私の妻に叱られる先きに、散々挑んだ母の天弦に怒られて蹴られ、うなられた。そして天弦は家を飛び出して何所かへ今しがた出て行つたと云ふ。

一寸之れを聞くと、子息のビーだけが馬鹿猫で天弦はさすが道を辨へた様な、淺ましながら母と子の感じが起ります。人には起る。只その裏の事實は、天弦は子を怒つたのではない。性慾故に異性を怒つた。その點この闘場では女が古兵で、男が新兵だから、段ちがひで難なく逃げられたのです。

逃げもがく奴をガツキと噛み捕まへて怒るのを怒壓し、争ひに克たなければ、自然の意志には添へないのです。彼等の「夫婦」は、殊に攻勢の夫は遠征的だし、かなり出鱈目でも、婦の方は、二夫なり三夫なりあるその *husbands* の中に然しいつも決まつたのがあることはそれはたしかです。決めると云ふより決まると書く方が當る程度で、彼女には少くも「夫」はあるにはあるので。例へば家の天弦には筋向ふのF下宿館の縁の下にゐる赤猫は毎年たしかに亨主らしい。

闘ひは烈しい。五年六年の古つはもの、牝猫にやつと一年の牡猫なき、とてもかなふものか。殊に質屋の牡猫を牝と思つて春中屋根でつけまはした様な新參のビーに、さうして親猫がつかまるものか。夫は妻を容赦なく去年の、又は今年の異性に掠奪しなければ、天意に添へない。それ故に親は中々子供とは、經驗がちがふから「淺ましく」夫婦になることはないかも知れません。さう自然におもひはあつて出來てゐるものと獨斷にかきたい、さすが「人情」を感じるが然し、人

情や觀念では成程世界がちがふと、露骨に思ふ場合があり、自然は屢々人間の道義より以上です。

時々親がからだが悪かつたりすると虚弱な子供が生まれます。又さうでなくとも弱い子がある。死んで生れる子もある。子が死んで生れるとすぐ親はその子を食べて了ひます。猫は産婦で同時に自ら産婆ですから、死兒を食ふのはその時彼女は「産婆」で、むごい「親」ではなく、死産の始末を付けるのです。一物も所有せぬ猫が又一番自然に始末する法です。死骸をほんやり投げやりにして置いて腐らすよりもせめて形を腹中へ入れて了ふのが、親の情か。又、生きては生れてもいつまでしても泣かない子だとか、首のぐつたりとして乳をのまぬ子、そんな、見るからに弱な駄目な子供は、それがまだ生きてゐても親はガリガリ食つて了ふ。前途を見透してとても生きても駄目なので、自ら殺して、食つて了ふのです。それが親猫の慈悲かも知れない。

三四年前に、今の天弦が一匹赤猫を生みました。それは丈夫な子でかなり可愛く健かに育ち、四寸に近くなりました。目も開いた。がさうなつてからの或る日のこと、さうしたのか足をくぢいて、それ以來病氣になりました。そして日ましに頭ばかり大きく、くぢいた足はしなび、腰はフラフラになり、親の乳もうまく飲めなくなりました。

その時は他に三匹、都合四匹の子を生みましたが、他のはピンピンして日ましに大きくなる。

毛も揃ひ釣合ひも猫らしくまとまつて押し合ひへし合ひ、乳にすがつてゐる。只不具になつた子だけは——何と露骨に適者生存を目撃したらう——不具になつた口のまゝで従つて小さく、とてもものになり相に思へない。従つて段々小さくばかりなる氣がします。

親猫は一視同仁です。一視同仁だから従つて不具の子だけには眼が届かないと同じ結果になる。彼女はおなかの乳はころりとねて出してやるが子には一々のましてはやらやらない。のむには子の方から一にも二にも動作するのですが、不具の子は従つてのめないのので口は開けき、聲も立たぬ姿になりました。又、私達がそれを氣にして人間の手で乳首をふくませてやつても、さうしてもうまく行かずに衰へる一方です。——時には他の子をみんな退けてその子にだけせつせと乳を當てがつたりマクリで牛乳をふくませて見たり、實に氣になつた。「オイ、お前の此の子は危ないよ」なき、親猫に云ひきかす。親猫はゴロゴロの音をならして我々の顔を見、愛情を示してあほのけになる。子供がある時は飼主がたよりで、仕方ないらしい。いちらしい。で、子を近づけるとしきりになめてやる。然しからだが不自由で乳がのめずにしなびてゐるとはまるで氣付かない。「氣をつけないと死ぬよ」と云つてもその人間の聲を、何かしら自分に云はれる愛撫と思つてしきりに喜び、安んじてゐる。その顔は怖く、無情だが、それだけに表現不足で一層愛情が眞率です。

こつちの想像へ訴へてかゝる。不具の子は親になめられ、ぐつたりとして、乳の上にはるながら矢張り吸ふ勇氣はなく、絶々としてゐる。

「困るね。『これは死ぬね。』」

「死に相ねえ」天弦さん、お前本當にさうにかする法はないのかい、なき、弱つたことがありません。

とう／＼それが猫箱で死にました。さうせ死ぬとは思つたが、朝見て彼の死骸だけ他の子達に踏まれて横たはり、他の子供はしきりにざはめいて元氣に乳をのんでゐる有様を見ると、無憐な薄命な氣がしました。

親は知らない(らしい)。で私は、その死骸を持つて——埋めるのに箱へ入れてやる爲め——二階へ何氣なく上りました。二階に丁度い、繪の具の木箱がある筈だから。

ところが、思ひちがひで木箱は仕事場になく、もしかすると何時か捨てたかも知れぬ。何か箱が要らなら見つけないと今は無い。私は死骸は二階へおき、又下へおりて来て、「餘計なお世話で二階まで棺へ入れに行つたが、無くなつた。あの白木の繪の具箱は有ると丁度棺おけにいゝのだが。」妻とそんなことを話しました。まあ、棺がなければあのまゝ埋めてやればいゝ。庭の隅へ。

——そこには墓標があつて、あいつの祖母と叔父やその他三匹、平和に埋めてある……

で、私は妻と「棺」の話をしてから下の茶の間でそのまゝ茶なごのみ、ぢき飯になるので新聞を見て待つてゐると、トン、トン、と例の猫が階段を下りて来る音がする。妻が「オヤ？」と猫箱を見るとそこには子猫ばかりで親猫は見えない。「いつの間に天弦は、二階へ行つてゐたのだらう。」私も變に思つて、

「俺がさつき見た時にはここに子を抱いてねてゐたのだが、——いつの間にか俺のあとをついてあいつも二階へさつき上つたのか知らん」

「さうでせう」

「すると俺があゝの死骸を持つて行つたのを知つてゐたのかな」

「あなた死骸をさうして來たの？」

「机のはじへ置いて來た。」

そこへ天弦が現はれました。——彼は私がさつき子の死骸を持つて二階へ上ると、それをねながら、然し眼以上の眼で見たにちがひない。何か親子のつながりでもあるのか。(あの子を人間は一體さうする氣だ?) 彼は私のスグあとからつゞいて二階へ來たに相違ない。私が二階にゐる間

彼も二階にゐたに相違ないし——その後ろから見てもられた眼を變に感じる——それからも久しぶりたに相違ない。で今、いつも通路に開けてある障子の穴から下の室へ來ました。が、私は思はず見て「アツ」と思った。それよりも妻が同じく彼を見て聲を挙げました。「何でせう。何でせう！ 氣味が悪い。」

私は全くあわて、然し氣味無氣味より一種イラ立ち、天弦の口からあんぐりくわへたものをもぎ取りました。と云ふより毆ぐつてそこへおとさせ、それから有り合はず新聞にくるんでキリキリ丸めた。それをそのまま、包んで家を出て、家の角から横町を曲がつて坂下のドンドン流れるドブ川へ行き、捨て、來た。そしてやつと安心して茶の間へ歸り思はず妻と顔を見合つた。

「あゝイヤだつた！」

親猫は子猫の死首をくわへてゐた。突然見た時ぞつとして何を變なものか？ と怪しく思つたが、よく見ると首の下に又首があるので寒氣がした。天弦の口には、死首が昨日までヒクヒクしてゐたあの不具の子の顔のまゝぶらさがり、眼を引吊らしてガツクリ口をあき、のぎのところでブツツリ噛み切られ眞赤に肉がたゞれて出てゐる。それをくわへて二階から來たのです。

この母猫は、恐らく二階で私がるなくなるとすぐ机の上の子猫のそばへ飛び上り、いつも子に

する様にくわへて下へおりやうとしたのかも知れぬ。その時初めて子猫が冷たく、かたくこわばつて死んでゐるのを識つたかも知れず、イヤ初めから或ひは知つてゐた（？）——何しろ、そこで死體を食つたのです。尻尾ものこさず、あとで二階のその個所を見ると血一滴たらさずモリモリ死兒を食つて了つて、首だけくわへて下へおりて來た。何故下りて來たのか、無氣味な他にはわかりませんが、死骸になつてまで親が子を始末するとは、思ひませんでした。

さうかと思ふと然しその親猫（天弦）はまた更にその親（チャン二世）が家にゐた頃にはカラ子供で、鼠も自分がとるよりは親がとつて來るのを待つてゐる。子供を生むことも自分一人ではうまく出來ませんでした。

或る時には全くフンをする様にその邊へやたらに子を産んで歩いて、困つたことがある。それをチャンが始終つけ歩いて泣き、心配しながら始末してやります。親が産婆で子が産婦の形ちです。ところが猫の子は體内を出切る迄うすく一重のカンテンの様な皮をかぶつてゐます。産むにはその皮に蔽はれたまゝ、一たん子供が外に出て、それから親がせつせとそのアア皮を食ふ。それで初めて産聲を上げて中から濡れた鼠の様な子が世に出ます。——それを、チャンが天弦の産の面倒を見た時には天弦が赤兒を生み出すと、まだ子が體内かすつかり出切らないのに産婆のチャ

ンがさしきしアマ皮を他からなめ取つて了ふ。恐らくアマ皮は外氣に當る折りをうまく考へて自然嬰兒にかぶせてあると思ふ。それを然し一匹が半分産をする。すぐそばから又他の一匹が手傳つてグシャグシャアマ皮を食つて了ふので、嬰兒はやつと外界へ出るとその時には既に、死んでゐました。無慘な「愛情」を感じました。

「下」猫三代

二年前でしたが、その「産婆」のチャンが死んで、娘の天弦だけになつた。のみならずチャンはその時一匹烏毛チヨウモと云ふ子猫を残して死にました。彼女(チャン二世)はバカに氣の強い、人間にもよくある勝氣なグズグズ出来ない、云はゞ亨主はそつちのけでせつせと工場へでも押し出し相な長屋のカミさん氣質のしつかり猫でしたが、それには生活自然、影響したと思ふ。私達は彼女を初め郊外大崎で飼ひました。そこは家のまはりがすぐ畑や川なので、自然チャン猫も家から遠出をする。遠出をして草地で生きものを取つたり時には何所か農家から、ヒヨツ子なごをせしめたことがある。何とうまかつたらう！身をふるはせて食つてゐた。

——あの鳥や鼠を食ふさまは別です。家畜ではない野獸で本能で、怖くなります。飼ふのはまらがつてゐる様な、いつものチャンは化の皮の様なイヤに自信のある、實に餘りに人間ではない、不思議な傍觀するほか無い氣がします。——兎に角その經驗で、自由大膽に少女時代を過し、それから東京市内へ越して來たのでした。が、ピツシリとあたりに家の立て込んだ市内へ來ても、彼女には今迄のくせは止められず、非常に遠出をする。よく町筋を二曲り離れた西洋料理屋にゐるのを見ました。

「チャンは？」

「洋食を食へに行つてゐるでせう」

さう云ふ獨立猫で元氣なものだつた。郊外でヒヨツ子やその他を外で食つた味をすつかり法式に心得てゐて、ボンヤリ家におかゝなご待たず、洋食屋はおろかせまい天ぶら屋へも奥深いすし屋へもさしきし行つて、自在に「自活」をする。

そのよく行つた洋食屋に、大きな赤毛の犬がゐます。時々家のそばへその犬が來るとチャンは怒つて飛び出して尻へ飛び付く。犬はノソノソ何の悪氣もなく臺所あたりへ覗きに來るのに、チャンの方は家からウーウー怒つて毛も逆立て、いきなり飛んで行つて尻へ掻き上る。大きな赤犬が、

その不意打ちに度きもを抜かれて悲鳴を上げつゝ逃げて行つたことが、屢々ある。——その能なき挑戦を、大方往來か洋食屋かでもチャンからやつたのでせう。或る日のこと、洋食屋の少手前の道ばたにチャンは全身硬直して、死んでゐました。それを知らせてくれた近所の子に聞くと、大きな赤犬にのさぶへを噛まれて振りつけられたと云ふ。勝氣に殉じてとう／＼やられた。

犬は自ら好んで猫を食ふなご、そんな事はしません。尤も犬にもよるが、彼は猫には大てい悠々として、問題にしない態度をとつてゐる。只猫がこれは例外なく、犬を見ると何れも殺氣立ち、怒るのです。恐らく然し羊を見ても猿を見ても馬を見ても怒るでせう。世に「犬猫」が仲わるとは決まらず、猫はごの動物とも、極端に云ふと自己以外のものにはそれに出逢ふ、さそくの挨拶には、忽ち相手に悪意を持つて攻勢に出ます。

然しそれも彼女の性格ばかりからするのではなく、又自分の武器の出来に依る。天意と云ふことが出来ず。一體弱く出来てゐて、得意の一手は素早く相手に第一印象のショックを與へ、ひるむ間に自分は木へでもかけ登る。彼にはそれしかありません。で、こいつは敵か味方かわからない、怪しい？ と見ると、斥候も偵察も愚か矢庭に第一撃の爪(實戰)を食はして、様子を見る。日本海軍の戦術のやうです。

——然しすると猫と云ふものは斷へず平和なく、殺氣に充ちてゐる様に見へるが、さうでなく、それが猫生活の自家防衛と延いては平和に對する前提らしい。「何故なら出逢ふすぐ容赦なく悪意と拳を投げた結果、偶々相手が自分の生活身體に害を與へないと納得出来れば、此度は仲間とおろかよくある様に犬とも猿とも全く仲よくなる。仲よくなつたら又「のほ／＼に仲よくなる。」と云ふのは猫にとつては、自家一家主義を振へる交渉が他とのあり得る唯一のつきあひなのです。彼はそれ故に孤獨で、戦意和意凡てに生活がエキセントリックです。一種諸動物中ののけ者視される濃い所以でせう。

洋食屋の犬とも、もう少しチャンが「猫」氣をおさへたら親しくなれる餘地は充分にあつた。又チャンがああチャンでなかつたら、よかつたかも知れぬ。その程度の性情の差は猫個々にあります。その頃天弦は洋食屋の犬が來ると背を高くして怒りましたが、その有様は假令犬の眼からもちしかに不快に、小しやくに觸つたと思はれる。然し、その犬は平氣で見すごしてゐました。天弦だつたら再三の中には融けたかも知れぬ。それをチャンでは、いつも度外れにすぐ搔きかゝつた。とう／＼ガブリとのきをやられたのです。實力は云ふ迄もなく犬と、問題にならない。然も此の相手は又半間優にある牡犬だ。

でチャンが横死してあとには生後一月にならぬ鳥毛が残つたし、天弦は三年にはなつたがカチ子供だし、困つたと思つた。彼女はその半月程前、チャンに心配かけてまぬけな死産をしたばかりなので。彼女の弟の小さな鳥毛は、まだチャンの乳から離れずにゐた。誰か育て手がなしには育つまい。それはチャン無き後は無資格な母——天弦には出来ない……

と思つたところが天弦は死産後で然異状なく乳が出た。その乳で、弟の鳥毛を育てました。自ら一人では今迄お産も出来なかつた奴が、母の遺児の鳥毛（弟）を慈しみ、哺乳し、立派に育てました。彼女は母が死んでから自らいつか母らしくなり、顔付き態度までが大人びて月の出の様に實際「獨立」し、境遇をすぐ生かせる叡智が忍ぶと思へる。我々はその様に感心しました。

——あまつさへ、今ではチャンが自分によつてくれた様に、それから天弦が鼠をとつて来て弟の鳥毛によつてゐた。學んだのです。その天意にはさすが、美しく感じた。尤も、天弦は近く不幸な死産で子を亡くしたから、たま／＼ゐた小さな鳥毛を弟と知らず、子とまちがへたか、その所は、恐らく天弦に聞いてもわからぬでせう。

彼女は今家の猫中での立派な元老です。元老と云つてもわからないでせうが、それは古くゐる猫にする待遇でそれ迄はチャン二世がその位置にゐた。食事の時そばにゐることを許し、鳴く度

びに飯をやり、それにやらない限りは他の猫に何かやらす、留守の時にはその分だけさしみても牛でもビーや黒猫の貰つた位で、とつておくのです。それにふさはしい又彼女には重みと格があつて、自然別だ。本屋の天弦堂へ行く筈だつたのが名だけ貰つて、彼女は残つた。

彼女についてはいろいろ記憶がある。中にも一度、全く殺して了はうと思つた記憶が忘れられない。彼女を見る度びにフツと、寂しい顔なごしてゐると思ひ起して今は又それ故に、一層親しい愛が湧きます。——が、一體この猫や犬への愛情は何だらう。小さな無力な、自分にたよられるもの、こつちがなければ向ふもないもの、少くもさう或る點で思へるものに、いつか年齢の中で感じる無垢な情だらうと思ひます。さう云ふ保育本能があるに相違ない。それは必らず猫が子に對して一番よきみなく流露する。私達には子供がない。それも猫をいつも飼つてくつたくしてゐる一因と思ひます。可愛くて仕方ないかなり内部の心理があるのです。

筆がそれでしたが、まだチャンのゐる或る時のことでした。その頃天弦が多分條蟲でもわいたか、始終腹工合が悪く、断へすそ／＼して汚なくてたまらない。全く汚くて堪へられない。家の者もみんな嫌ふし病氣は服藥させても猶つものるばかり、始終その邊を掃除してゐないとやり切れぬ始末です。天弦を思ふと家の中が陰氣に、不愉快で、捨てる考へも起りかけてゐる。殊にその

最中のある夜のことでしたが、泊り客がありました。彼等下の室の者は、みんな客間へねました。が、「ホラ、天弦があつちへ行つた」又此方へ来た「キヤア畜生！ 畜生！」とわいわい騒いでゐる。夜十二時を過ぎた頃です。私は二階でものをかきかけてゐましたが、下の騒ぎが耳につき、泊り客の女は殊更仰山に邪険に叱する。その聲が耳につく。氣になつてイライラしてまるで何にも出来ず、落付くことが出来ない。

「叱！ 叱！」と何かで猫を追ふ憎し氣な聲が又きこへます。全く天弦が汚ないのである。——その一瞬に、カツと名狀しがたく腹が立つて来て私は、ペンを叩きすて、粗暴に階段を下りて茶の間から襖越しに客間の妻へ、云ひました。

「天弦の奴何所に居る！ つかまへろ」

嚙み付ける様に。その私の怒鳴り、且階段をかけ下りて来た見暮は一時あたりを靜かにしました。

妻がねまきで出て来て、

「さうしたのあなた、急に怒つて」

「猫は汚ないし人間はうるさいし何んにも出来ない。馬鹿野郎。殺しちまへ、あんなもの！」

私は親せきの者がさう思はうと、いゝと思つた。(貴様も同類だ！)

「何所へ行つたんだ、猫をよこせ。」

妻はあつけにとられ、泊り客はひつそりと恐らく様子をうかがつて、かたずをのんでゐる。私は動悸ばかり變に感じた。そこへのつそり天弦が出て来た。私はいきなり彼をわしづかみにしてそこへ座り、妻が、「殺すなんてあなた——」。私は何くそとイヤと云ふ程猫をおさへて、疊へ力任せに鼻づらをこすりつけた。猫は悲鳴を上げてあばれ、私の腕を蹴りに蹴る。畜生！ 私は立つておろく／＼見てゐる妻に云つた。「ボンヤリ立つて居るな。向ふへ行つてさつさとねてゐる。騒ぐにや當らねえ。俺が片づける。——その襖をしめとけ。」

私は此の猫を此處で殺して、ギャー／＼騒ぐ下の室の奴等に一種面當てしてやる氣があつた。たしかに。意識裏に。私は天弦をしつかりおさへ付けていました。

「何故いつまでも見てゐるんだ！」

妻はそれで隣へ退きました。天弦はだら／＼ねばる液汁を疊へ垂らして私におさへられ、然しおとなしくしてゐます。反抗せずになつとしてゐる。さうして殺してやらう？ 何かヒモでも巻いてめてやらうかとその邊眼でさがした。私は猫を離して力任せに一つ突きやりました。彼女

はざらららと疊に爪を引かけて、辛くとままり、一三尺向ふにけし飛んで、そのまゝ、ちつとちつとまつた。チロリと眼を上げて私を見たが、更にちぢまつた。そのまゝ、聲も立てず、逃げもしない。只何か投げ飛ばされた筋道に液汁の點々を汚く飛ばしてそれはまだヂクヂク出てゐる様である。そこにしよんほりと背をすほめ、下を向いてゐる。

私に殺意があらうとは、まさかにも思つてゐないに決つてゐます。こぢられ、投げられたのは日頃のくせで、自分が悪いのだと思ひ、息さへ低くしてゐる。——病氣である。觀念してゐるやうに見える。あたりは静かで、シンシンと夜氣と静けさが心へ沁みて来る。この猫を殺さうとして、——さうしてそんなことが俺に出来るものか。それは初めからさつちにせよ實は心理の底では、わかり切つた話だ。私はこの猫にさうしても愛がある。その愛情を、この節この猫はひきく汚くて全くホトホト愛想がつきるし今夜は家へ又他人がはいつて、殊に猫故に散々イヤがり、我鳴つたり騒いだり、私は何彼と阻害される。——凡てこぢれて愛情が出にくい。素直でない。それ故ムシヤクシヤして私は怒つたのだ。お前が強ちにくいわけではないのだ……私は「天弦、天弦」と彼を呼んで見た。ひくゝ。それから手をのばしてちつと動かすにゐる彼女を引きよせ、背を撫で、のきをさすつてやりました。哀れなしみじみとした感がした。彼はだらだらからだを動

かしたあとに液汁の糸を引きながら、まだちぢこまり、然し次第にゴロゴロの音を鳴らして私のそばにかゝんでゐる。のきをさすると目を細く、首をさし出す。めめてもかまはないと云ふ位ゐ、私に身を提し、甘んじてゐる。

結局私は、又之れを下へおいてはグズグズ泊り客が騒ぐだらう、うるさい。いつそ俺が今夜は連れて行くと決心的に考へ直した。で、合の襖をかたく切り、それから汚いが一思ひに猫を抱き上げ、二階へ上つた。私は着物を汚された。然しさうせ汚れたらそれまでと思つて、毒ではないだらう。その晩抱いて、ねてやつた。私は床も何も彼もシミだらけにされたがいつそ面倒でない愛情の方が汚いよりはいいと思つた。私は天弦を無垢に感じた。かくてできちのだらけの子を世の母は此の種の萬倍の至情で抱くか。

彼女は元老で、今健康にその後の二匹の子と共に、家にゐる。一番小さい今ゐる黒はやつと四月でじやれ盛りです。猫にも不運なのがあつてよく来る宿なしの赤は二三匹子猫と共にコソコソその邊のゴミ溜なきをあさつてゐますが、親子ともやせて色つやが悪く、何れもコセコセしてガタリとするとすぐ逃げる。子猫もチョコ／＼一所に逃げます。じやれるゆとりさへ無さ相に、不幸だ。

それに引かへて家の黒チビは、鷹揚でのんきで、滑稽で、さこへでも長々とねるが、眼がさめれば騒いでゐる。母には鼠を買ふし、人には飯を貰ふ。愛撫はあり餘るし、之れで苦勞なく何れ猫なみに成育するかと安穩に思ひますが、然し彼には彼で又今後難義も経験もそれ相當に重なる。人間の留守には二階の戸の切り穴から出入することをおほへなければならず、前の家の塀を傳はると竹竿で突き落される目に幾度かこりなければならぬ。洋食屋や靴屋の犬とも何れは出逢つて感情を不安にもまれなければならぬ。殊に危険なのは、鳥毛が曾て出逢つた様な、猫イラズでやられた鼠を食つて床下で横死する不運なき、或ひはないとは云へません。又は魚の大骨をアゴに立て、了つて、ダラダラ唾液を流して長時間、人に氣がついて、抜きとつて貰ふ迄辛苦しなればならないかもしれぬ。

猫さらひの危険もある。黒チビを見るとその天真の可憐の影に、そんな思ひが消えずに立ち迷うてさすが猫生活も、安閑ではないと思ふ。老天弦は凡て之等を識つて既に生活に程と賢しさを生じ、靜かに考へ深く、首が年功で細くかたくなり骨ばつたからだで、毎日過してゐます。平和に。——その仲間のビー猫は又のんきで、仕たい放題、自家一家主義を試み、魚屋が來るとその聲でねてゐても飛び起さる。ガラリと隣りの戸が開くとKおばさんがいつものドア板へ何か食ひ

餘りを開けてくれたと心得て早速出かける。そんなことは凡て抜目なくおほへ、我々には巧みに甘へて食餌をねだる。この頃では太つて一貫三百匁からあります。悠々と、彼の青春を楽しんでゐる。私の猫共ですが、又猫にとつても此處は彼等の家なのですから、その生活はいろく、自主自由で相當に存外考へもあるでせう。水は手洗鉢のがのみい、食事は一番あの二階の男がおか、を澤山、飯を少なくくれるからあれにねだるのが利巧だし、晝間は下の八疊がねよく、朝は二階に集るに限る。ゆつくりねられる。呵々。私は彼等といつも親愛です。(大正十年八月記す)

附稿

思ひ出 (大正九年記す)

玉

私は十位るの時から、家に猫のゐたことをおほへてゐます。その猫が私の親しくした初めての猫で名を玉と云ひ、女でした。白の多い三毛で、恐らく私の八つか九つ位るから家にゐた様に思ひます。それを貰つて初めて「猫」を持つた時の感じも異様に思ひ出ですが、臆ろです。何しろ九年間一所に居て私とは特別親密にしました。が、私が中學を卒業する頃から、彼女はいつとなく健康な日が少くなり、間もなく死んだ。死んだ時には、私は家にゐず、盡かきに獨立して小石川の方に離れてゐましたが、玉は塚の向ふ側の烟草屋の屋根で死んで乾しかたまつてゐた相です。

若しかすると頼りに思ふ私がなくなつたので力落ちして、死んだのではないか、と今も思ふ。私はその頃繪の仕事を思ふ一念に多忙で、つい玉のことは家を出てからは忘れる時も多かつたが——然し外で猫を見るときまつて玉は如何してゐるだらうとは斷へず思つた、——或る日家へ行つて玉の死のことを突然聞き、全く萬感のこみ上げる氣がしました。一つの自分の過去の一片——又は紀念——が、死んだ様な氣がした。この間までゐたのもう死んで了つたのか。私の小學中學ともずつと親しく一所に過したのもうゐないのか。全く、互ひに一つしかない一生の氣がします。同時に一人しかない友の感です。玉は私の「少年」を誰よりもよく知つてゐる一つの生いぢです。僕の膝へは、彼女はそこが巢のやうにきつと來たのだ。九年間斷へず。私は子供の時玉がゐないとねられなかつた。今でも私は彼女の整つた顔もおほへてゐるし、聲もおほへてゐる。只形ちだけその後の猫と記憶が交つてはつきりしませんが、彼女の存在は只いつも私の記憶に鮮やかです。

私は玉にすまないことがある。——その時の彼女のつれなさ相な孤獨な影を思ひ出しますが、彼女が綺麗な三毛の子を生んだことがあります。その頃既に病身の初めでしたが、私はその子と玉と一所に育て、ゐるうち全く子の方が親の玉より好きになつて、玉が少しうるさくなつた。子

を私が抱いてゐると膝の上へ又玉がわり込んで子を下ににして、子は窮痛なので這ひ出して下ふ。私は心からこの子の方が貴様より好きだ。と玉に對して思つたことがあります。如何にしたわけか、その時玉が悄然と私の膝を下りて、藏の戸前の黒塗りの上に立ち、寂し氣にあらぬ方を見て、それから外へ出て行つた。

私の膝へは、代りに子猫が乗つて來た。然し私は何だか氣をつけて、さすがあの玉とは全く僕が此の子猫位ゐる頃から仲よくしてゐる、この子猫はまあ可愛らしく面白いが然し淺い。とはつきり思ひ、それ以來、玉が厭ひと思へなくなつた。——あの時玉は寂しがつたかと思ふ。私が追ひ拂ひもさうもせず、只イヤだと胸に思つただけでフイと出て行つたのが氣にかゝる。

が、何と私をたよりにしてゐたでせう。私は時々玉を忘れたが、玉は始終私を忘れなかつたかに思ひます。夜中に暗中を手さぐりして便所へ行つたことがありましたが、神棚の下のところ矢庭に上から肩へ玉に乗られてひやつとしたことがある。思はず立ちすくんだが、その時玉はもう身をすりよせて肩のせまいところであつちこつち廻り、頬すりをするし、ゴロゴロ云つてゐる。私は飯をこしらへて、それを食はせてから抱いてねた。玉はあの時うれしいと思つたか。

私は玉から悪意を感じたことをまるで思ひ出せない。彼女に對しては私が思ひ足りなかつた悔

ひばかりです。殊に晩年に別れてゐたせいからさう思ふのでせう。彼女はコチコチに干しかたまつて煙草屋の屋根に死んでゐた。その時私はたしかに毛程も彼女のことは思はなかつた間に。二人の間に、九年経つたのだ。私は子供ではなく、その時青年で嵩かきになりかけてゐた。大人になるにつれて彼女には無情になつたでせう、本意ない氣がします。こつちは有意識、向ふは無意識なだけに。

彼女は澤山に子を産んだ。その度びにみんな^{かたが}一^つ本づ、つけてお嫁やおむこさんにやりました。いつも私が仲人だつた。玉はそれには知らん顔をしてゐた。子供がゐなくなつて變な聲で夜泣いても、私が「玉、玉」と呼ぶとやつて來てゴロゴロ云つて安眠しました。

V I E

私は嵩かきに獨立して小さい家を借り、二年ばかりすぎた。此の二年と、記憶せぬ子供の頃の成る年月とが私の猫と離れて住んだ時間です。で、異例です。恐らく今後へもさうかもしれませぬ。私は猫が好きです。私の生活それ自身それを好む様に好きなのです。猫がゐないと一種物足り

ない。夜おそく起きてみると家中で猫だけ御相伴に起きてゐて、向ふもこつちの起きてゐることに一種の喜びを感じてゐる——にちがひない。さう云ふ時には、その他の時には一度もゐたことのない私の机の一隅にゐる。彼も寂しいのできつと一つところにゐるのです。私は彼女がゐるので仕事か抄取る。イブセンはサソリを机の一端へおいて、彼が林檎へ毒を注す様を見ながら仕事をすることを好いたと聞きましたが、「好いた」と云ふ共通から私は机の上に猫にゐて貰ふことを好みます。彼女は夜の満々とした巴の様な眼を見ると、何か気がすんで無心になり、疲れてゐても元氣を取り戻す。

で、二十の頃私は獨立して赤阪一ツ木に猫と離れて生活しましたが、或る日その借家の裏手を散歩するとはからず石段の上に、捨てられた小さな黒猫とブチ猫を見た。私はそのまゝ素通りするに堪へ得ませんでした。然しブチ猫はひさい眼くさりで汚なく、氣の毒だとは思つたが、強ひて連れ歸る程又氣の毒にも思へなかつたし、それに友達も一所で「ヨセ、ヨセ」と云ふ。私が捨猫に近づくことさへ既でにヨセと云ふ。それを一種口實に感じて、全くブチには氣の毒だつたが黒だけ拾つて歸つて來ました。

彼にはビイと名をつけました。私はその頃雜誌生活をやり生活社にゐたので、LAVIEのビイです。初めは女かと思つたが、段々時が経つと男と知れた。胸の一吋白いほかは全く黒のカラス猫でした。慄悍な顔をして見る々々優勢に大きくなり、ステツキの様に尾を振り立て、のさばり歩く。面白い。私はすつかり彼が氣に入つた。

時々然し丈夫な元氣なビイを見るにつけてその兄弟(?)のブチの成行を考へたが、多分誰かに拾はれたでせう。ビイを拾つた翌日又散歩に行つて見たが見えなかつたし、——然し、この事は間もなく忘れられました。今久しぶりで珍らしく思出した程度に。

矢張り「猫」を一體に好きは好きなのだが殊に「自分の猫」が段ちがひに好きなのです。さうも自然です。そこにはいつか生活的に記憶や背景が付き、離れられなくなる……

で、黒猫のビイは生長した。大きく、ノンキ坊主に面白く育つた。が結局彼とはそれだけのことで別れました。

彼は元氣で快活でトンキョで「おもちゃ猫」にはよかつたが、一體牡猫は情がなくくさくエゴイストすぎ「動物」すぎます。久しく家にゐないので心配してフト氣がつくと、なんだ！ 女をあさりに出て疲れて向ふの物干しにだらけてゐる。毛程もこつちを思つてゐることか。さかりがつくと、まるでそれ一方で飼ふにたよりない。人間の極道者が汚ないやうに汚ない。それが

家にゐるだけ猶イヤらしく汚ない！

ビイはその感を私にくさく感じさせてゐた頃、丁度家から欲しがつて、来たので、やりました。鼠の番に。尤もそのやる時、「このバカめが——」とつくづく彼を見て思つて、寂しい人情以上憎む方が亂暴な氣はしましたが、一體私はその頃ビュリタンの氣持でゐて前に少し経験したことのある性慾の不淨生活を心から厭はしく感じてゐた。それで假令猫からもその氣合ひを餘り無遠慮に見せられるのは、我慢出来ない、イヤな氣がしたので。——それで彼とは別れました。

その後も私が實家へ行くと、ビイは相變らずのつしりと歩いてゐた。が、「ヘン、ろくなものは食はせやがらなかつたくせになんだ」と云つた横柄な顔をしてゐました。私も「とほけた野郎だ」と思つた。時々抱いたが「自分の猫」の氣はしなくなつた。彼はその後、行方不明になつた。

チャヤン

翌年、私は結婚しました。そして南品川へ家を持つた。妻は子供の頃から知つてゐた友達で、「結婚」が自然になり、生活を合したのです。

彼女は私と結婚するのでそれ迄飼ひ馴れてゐたコマ鼠を一家族連れて来る筈でしたが、その話のあつた頃はまだ私の家にはビイがゐるので、氣になつてゐた。——ビイは何しろ變な時私と識り合つて、實は此の件も一原因できよく別れたのかも知れません。が、心配の猫はゐなくなつたが、彼女（妻）の鼠は病氣にかゝつて、みんな死んでしまつた。それで妻、イヤその頃×子は、廊下のスミで空箱を見つめて泣いたと云ふ。私はその知らせを丁度その頃行つてゐた兵營で聞いた。

私は可哀く思つた。鼠を？ 否、その死を泣いた方を。で、班から同情の長い手紙をかいだことを思出す。イヤハヤ！ 戀にかゝつては、猫も鼠も妻を正視されず、材料になります。愛情の。呵々。

間もなく私は眼の爲めに兵營を出されて、寒い年の暮れに、郊外へ家を持ちました。来る筈の鼠が來なくなつたので、代りに一匹猫を飼ふことにしました。私は實家のそばからやつと乳ばなれした綺麗な三毛猫を買ふことが出来て、或る日彼女を煙草箱に入れ、院線電車で南品川へ連れて來た。

私はその猫をバット新居の疊の上においた時のシーンを思ひ出す。それが我が家の「チャヤン」

世になつたのですが、彼女はビイ／＼泣いておほつかなく這ひ、それまで鼠は知つてゐたが猫は初めての妻は珍らしがり、又氣味悪がつて白い前かけに兩手をくるみ、しきりにかゞんで熱心に見てゐる。それが私には今後にかけて面白く、楽しい。此度こそ「俺」の飼ふ猫と云ふ氣がします。私と妻が飼ふ。九年生きるかしらん？うれしく、楽しみで、無上に愛を感じます。

小さなチャンは段々と育ち、美人になり、よくヂヤレ、妻にも馴れ、我家にこよなき愛猫ベツトとなりました。が、我々がその家から大崎へ越した日、引越のささくさに、とられたか迷兒になつたか、姿を消した。我々は荷が落つてから一瞬フツとチャンの不在に氣が付いて、そのつい前に門のそばの石の上で妻は見たと云ふ。チャンはあんかにはいつて食器と一所に荷車にゆられて來たのです。——そのゐないと思つた一瞬が一時間になり、三時間になり、我々は段々眞剣に、方方探しました。夜まで探したが見えませんでした。幾々は力落ちして、寂しく感じました。

變なくす屋がヂロリと家を見て夕方通つた相です。きつとそいつに違ひない。可哀想に！あんな無垢な思ひの猫は、又ゐません。

チャンを思ふとその背景が忍ばれる。生煮への米や、毎日同じおかず、それを又喜んで食べる二十一と二十二の我々の夕方、小さな三毛猫がチョココンと二人のわきに座つて首をかしけて見

てゐる。——さう云ふ不死の日の紀念に、永久に美しく、チャンは神かくしに逢つたのかも知れません。私はその後にも何匹も猫を持つたが、その何れにも「チャン」がゐる様に思ふ。チャンが猫天使で我等を守る様に思へます。それ故家の猫には、引きつゞき「チャン」の系統の名を付けます。

で、二代目のチャンの時から我々は市内へ越して來ました……

1. 16年9月... 2. 16年10月... 3. 16年11月... 4. 16年12月... 5. 17年1月... 6. 17年2月... 7. 17年3月... 8. 17年4月... 9. 17年5月... 10. 17年6月... 11. 17年7月... 12. 17年8月... 13. 17年9月... 14. 17年10月... 15. 17年11月... 16. 17年12月... 17. 18年1月... 18. 18年2月... 19. 18年3月... 20. 18年4月... 21. 18年5月... 22. 18年6月... 23. 18年7月... 24. 18年8月... 25. 18年9月... 26. 18年10月... 27. 18年11月... 28. 18年12月... 29. 19年1月... 30. 19年2月... 31. 19年3月... 32. 19年4月... 33. 19年5月... 34. 19年6月... 35. 19年7月... 36. 19年8月... 37. 19年9月... 38. 19年10月... 39. 19年11月... 40. 19年12月... 41. 20年1月... 42. 20年2月... 43. 20年3月... 44. 20年4月... 45. 20年5月... 46. 20年6月... 47. 20年7月... 48. 20年8月... 49. 20年9月... 50. 20年10月... 51. 20年11月... 52. 20年12月... 53. 21年1月... 54. 21年2月... 55. 21年3月... 56. 21年4月... 57. 21年5月... 58. 21年6月... 59. 21年7月... 60. 21年8月... 61. 21年9月... 62. 21年10月... 63. 21年11月... 64. 21年12月... 65. 22年1月... 66. 22年2月... 67. 22年3月... 68. 22年4月... 69. 22年5月... 70. 22年6月... 71. 22年7月... 72. 22年8月... 73. 22年9月... 74. 22年10月... 75. 22年11月... 76. 22年12月... 77. 23年1月... 78. 23年2月... 79. 23年3月... 80. 23年4月... 81. 23年5月... 82. 23年6月... 83. 23年7月... 84. 23年8月... 85. 23年9月... 86. 23年10月... 87. 23年11月... 88. 23年12月... 89. 24年1月... 90. 24年2月... 91. 24年3月... 92. 24年4月... 93. 24年5月... 94. 24年6月... 95. 24年7月... 96. 24年8月... 97. 24年9月... 98. 24年10月... 99. 24年11月... 100. 24年12月...

病中記、三稿

1. 16年9月... 2. 16年10月... 3. 16年11月... 4. 16年12月... 5. 17年1月... 6. 17年2月... 7. 17年3月... 8. 17年4月... 9. 17年5月... 10. 17年6月... 11. 17年7月... 12. 17年8月... 13. 17年9月... 14. 17年10月... 15. 17年11月... 16. 17年12月... 17. 18年1月... 18. 18年2月... 19. 18年3月... 20. 18年4月... 21. 18年5月... 22. 18年6月... 23. 18年7月... 24. 18年8月... 25. 18年9月... 26. 18年10月... 27. 18年11月... 28. 18年12月... 29. 19年1月... 30. 19年2月... 31. 19年3月... 32. 19年4月... 33. 19年5月... 34. 19年6月... 35. 19年7月... 36. 19年8月... 37. 19年9月... 38. 19年10月... 39. 19年11月... 40. 19年12月... 41. 20年1月... 42. 20年2月... 43. 20年3月... 44. 20年4月... 45. 20年5月... 46. 20年6月... 47. 20年7月... 48. 20年8月... 49. 20年9月... 50. 20年10月... 51. 20年11月... 52. 20年12月... 53. 21年1月... 54. 21年2月... 55. 21年3月... 56. 21年4月... 57. 21年5月... 58. 21年6月... 59. 21年7月... 60. 21年8月... 61. 21年9月... 62. 21年10月... 63. 21年11月... 64. 21年12月... 65. 22年1月... 66. 22年2月... 67. 22年3月... 68. 22年4月... 69. 22年5月... 70. 22年6月... 71. 22年7月... 72. 22年8月... 73. 22年9月... 74. 22年10月... 75. 22年11月... 76. 22年12月... 77. 23年1月... 78. 23年2月... 79. 23年3月... 80. 23年4月... 81. 23年5月... 82. 23年6月... 83. 23年7月... 84. 23年8月... 85. 23年9月... 86. 23年10月... 87. 23年11月... 88. 23年12月... 89. 24年1月... 90. 24年2月... 91. 24年3月... 92. 24年4月... 93. 24年5月... 94. 24年6月... 95. 24年7月... 96. 24年8月... 97. 24年9月... 98. 24年10月... 99. 24年11月... 100. 24年12月...

私に小説を書けとのことですが「小説」は書けないことを感じます。之れならば書けることを感じたので筆を執ります。「之れ」とは何か。——何になるか書いて見ないとわかりませんが、私は今或る外科病院にはいつてゐるのです。

その階上の一室で、筆を執つてゐます。

私の座右に M. & I. Pencil Co. 云々の赤鉛筆がありますが、私は之を見ると入院當日のことを忍び思ひます。従弟が私を此所まで送つて来て、此の鉛筆及び黒鉛筆、ハガキ二十枚を買つてくれました。

四月二十三日の晴れた午後でした。

私はその日少しはいつもより工合がよかつたので、かねてから私の病氣を心配してゐる義兄が來たに任せて、自動車に乗せられ、従弟と三人で此の醫院へ來ました。

來るとすぐ患部へ切開手術を受けました。——そして當分入院することになった。

二人は一たん私を病院へ置いてうちへ返りました。その歸りがけに鉛筆とハガキを買つてくれたのです。又、「では一寸歸つて又直ぐ來る」と云ひながら室を出かけた義兄が、その時私の抜きすてた羽織がわきにまるまつて亂れてゐる。それをた、んで床におき、挨拶をして出て行つた。

彼とは二十年近くよく知つてゐるが、羽織をた、んで貰つた記憶は之れが最初で新鮮です。

私はそこにちやんとた、まれた羽織を見て、そのキチンとした羽織の様に綺麗な愛情を感じました。

私は病氣は簡単な腫物だが、只場所が悪いので丸で歩けないのです。

十疊位の一室には真中に白い寢床が敷いてある。——私は二人が歸つて後、一人切りになり、その床の上にやつとねころんで、たつた今醫師がキツチリしめつけた足の縫帶をこはごは感じながら、煙草をのみました。

煙草盆のわきに今義兄がそこにて飲みかけた坊主湯の茶わんがおいてある。それをつい目に付けると矢張り義兄がそこにゐてくれるとい、と思ひます。

私はすつかり心が寂しさに顫へて、日常でなく緊張してゐることを感じます。

丁度之れと同じ心理に去年大連で成つたことのあるのを思ひ出します。

それは大連の或る旅館へ私がいつた時でしたが、その時には既に連れの K 氏は先へ歸つてまるで知らぬ土地に全く私一人になりました。

私は一體どうも心がおびへる。人となつかない。——その大連の旅館へはいつた時には、私は

室が決まるとすぐ便所へはいりました。そしてそこは誰にも見られないので、ホッと気が延びました。

六月終りで既に向ふは暑くなつてゐました。

何でも便所の中窓に面下り格子のサンがあつて、その一本のサンのコバに虎の斑の様に、はつきり木目が光つて出てゐた様を幻燈の様に目が想ひ起す。

上に大きな鯛が何匹かチーチー云ひながら飛び交ふてゐました。——そして明々と日差しが上の明りとりから充ちてゐて森閑としてゐた。

私はこの明らかな静かな便所にはいつてゐるんなことを雑想しました。……フト気が付くとチクタクチクタク鳴つてゐるものがある。

いつも帯の間にはさんでゐる時計です。——その規丁面な忠實な音が、全く世にも親愛に感じた。俺の仲間は今之れだけでしきりにチクタク云つてゐる。出發以來の何も彼も知つてゐる——生きものゝ一つの氣がしました。

○

然し病院は「大連」でなく芝なので、土地は私に頗る親しい。變に寂しく氣がまひへながら病室

の真中にねころんでゐても、幸か不幸か病間は電車通りに面してゐる爲め電車の音が轟々と聞こへる。その音の度びに何所を何の電車がどう走るか、私にははつきり手にとる如くわかる。又此の病院が何所にあつて、前は何で後ろは何だ。ここからどう行くとどこへ出るか、よく知つてゐる。のみならず此の近隣に住んでゐる人も少なからず私と知り合ひがあるのです。十年以前の。如何してゐるか。——私は此の近くに三年餘りゐたからです。それで自分だけ丸で此の病室へ切りはなされた氣は、しないですむ。

如何に人はさう云ふ「環境」を重大に生活にとり入れるか。

私はもしも北京でかくの如く入院したらさう？ と想像しましたが、恐らく病苦より寂しさにやられて倍になるでせう。

私の病氣もまあ此の病院なら、環境で自然忍ばれると思つた。

そんなとりとめない雜想の間に家から弟、妻、従弟がいろいろ荷を持つて來ました。

私は俄かに強くなつた。

「さあ、此度此所を出りや癒るんだ。もう安心だらう」

「痛む？」

「イヤ格別。癒る氣がするから我慢出来るさ」
云々といろく話しました。

然しその中に夜九時が来て、それが「門限」の決めとなり、みんなが歸るとがっかりしました。又明日は来る。

只その「明日」までが苦勞である。

電氣はほんやりと十燭光しかついてるません。そのうす暗い下に今日持つて来た机があつて、ペンや紙がのり、それは私の室のやうだが見る見る私の室らしくなくいきなりわきに床をしいて、拙く動くと痛む體でねてゐる。ミゼラブルな不運な不本意なイヤな感じがする。で、「病氣」をくさく意識します。且、いつも夜ふかしの僻でねやうとしてもねやうとしてもついねむれません。

○

四月二十五日記。毎日「夜」を恐れてゐるが恐れたところで仕方がない。長い習慣は直らない。むしろ肯定せよ。その方が得策と思ふ。痛みは外形的である。二日睡眠薬を買つてねるが、今日は十二時になると目がさめた。之から朝までが長い。然し夜のみならず、凡てに肯定的に出よ。その方がいゝと思ふ。負けてゐた日には切りがない。何れ又いゝ考へもあるだらう。(夜中記)

……此の行末には、一言「癒りたい」を入れるのがありくと實感です。その頃私はそれを口に
出すが怖かつた。何しろ二寸に近く切られた深く生々しいキズ口の事を考へると、すぐに癒ると
はとても思へない。まだ當分は駄目である。——そしてあきらめて、早く云ふと「参つて」しまし
た。

○

然しこれからは日が経つて、治療もはか取り、私は今ではまあ楽しみなコンヴェルサンス期に入
りました。夜も怖くないしキズもさして痛まない。露骨に、「早く癒つてくれるといゝ」とも思へ
るに至つた。——さう云ふ今筆を執つて、此の何になるかわからぬ稿を書くのです。作者は半ば
健康です。それ故不健康なことは餘りかゝないでせう。

或る醫師

私はあゝ云ふ醫師が世にあることを思ふと、極くけんのんな取しまり不充分的感じがします。
然し醫師に云はすと之れでも熱心に、全力をあげてやつてゐるのだと云ふかも知れない。然しよ

り公平に彼を云ふと、渡世の爲にあのけんのんな仕事をしてゐるとしか思へません。自分でもさう感じながら。——危ない。

世にはいろいろの仕事があるが、まだヘツボコ書かきなきは害にもならないがヘツボコ醫者はけんのんです。——所が私はさう云ふ醫師に出逢つた。

此の病院へ来る前でしたが私は足の腫れが氣鬱しいので——然し大したものとも思はずに——近所の醫師へつい行きました。権藤醫院と云ふのです。

で、その「先生」は古い建具の三間の平屋に各科醫院のかんばんを出して住んでゐます。妻君がゐて可愛い、小さな女の兒がある。二人？——よく醫院裏に物干竿がかつて、赤や白の小さな着ものが乾してありました。それ等がひらひら低い灰黒い主屋の屋根上に舞ふてゐた。

それは哀れな感じでしたが又しみじみした何だか、それに就いては一切黙りたい氣にさせられるシーンである。氣が變ると一種平和な感じもします。又ハムブルでいゝ様な氣もする。

——さう云ふ醫院へ通つてゐました。

醫院はうちから三十間もなく、患者の私は腫物が足なので、乗るものは響くし、うまく歩けないのです。それでつい近いに引かれてそこへ通ひつけ、ズルズルになりました。

約一ヶ月通つたかも知れません。

初めて「醫者へ行きたい」痛みを感じたのはたしか三月の十七日頃でした。

「何所の病院へ行かう？」

「さうね。権藤さんなら近いが」

「あれでいゝかしら」

「小さい腫物だからいゝでせう」

と妻と話して権藤醫院へ出かけました。——その時恐らく私の「運」の神は——それは私の腫物が出来た時からさうでしたらうが——目を蔽ふてゐたでせう。

私は茶色の散薬を買つて、清々とし直きに歸つて來た。「何でもないとさ。自宅で之れを一日二回つけばいゝ相だ。」

癒るだらう！

所が癒らない。

私はたしか四日、その散薬をうちでつけてゐましたがキズの痛みは止まるが、只腫れが次第に氣重く他部分へまはつて來る。その「四日間。」ナボレオンが何か軍の勝負は最後の五分で決まる

と云つたが、私の運も恐らく權藤醫師に診斷された五分か十分でかなり決まつたのです。此が名醫——否、普通の醫師——ならすぐ切つたかも知れない、權藤さんは切らずに簡單に自宅療治をすゝめたのです。患者の私は一時安心したが、その安心した私がのんきに散薬を振つてゐる間に何か毒が内部へ優勢に進んだのです。四日間、百時間近足を犯したのです。

無論私も悪い。權藤醫師へ行つたのも悪からうが第一、痛みだけでキズを判斷するが悪くそれを軽く軽く見つめる傾向が悪く凡て樂觀がいけない。然し凡てかうなると運でせう。私は痛みは氣のせひか薄らだが、只氣が重く、殊に著しく足の腫れがいません。

それで五日目に又醫師へ行きました。

「イヤ、お見えがないから癒つた事と思つてゐましたがまだお悪いのですか」
私は患部を見せた。

「之はいかん」

と彼は云つて、然し「性質の悪い腫れではないから多分切らずにすみませう。まあ毎日診せに來て下さい。」彼は同じ様な散薬のキズ手當てをしてゐたがそれから、「注射をしませう。この腫物には凡て効のある注射がある。」

「何ですか」

「カルシウムです」

私はそれを聞いた時、一種利く様な氣はしたが又「クロボトキンです」「勞働運動です」「XXで」と云はれた様なはやりもの、名を聞くに似た、少したよりない感はしました。

「……カルシウムを注射液にしたのですか」

「え、之ですがな」と彼は茶色丸形のガラス器の液を見せて

「今はカルシウム全盛ですな。何所へ行つてもやります」

私はい、感情は起らなかつた。(そんな十把一束のものがきくのかしら)。X圓均一の麥ワラ感がある。さう云ふ藥はイヤである。……然し二の腕へ注射を受けて歸りました。

○

それから私は「病氣」になりました。

權藤醫師は切らずにすむくと云ふが腫れは益々ひどくなる。外から見ては大して目立ちもしないが患者——私は内から見て、少くも「感じて」その不安心は例へられない。然し係り醫師を今變へるには私は既に、殆んど身體が動かせないのです。

遂には醫師に來てもらひました。

彼はインバネスを着て中折を被り、革靴を持つてやつて來る。そして或る日のこと、腫れの一部をメスでさして薬液を中へ注射しました。——その痛かつたことは——

「これは九州大學のX先生がやられる法で帝大でも△先生がやる。私は親しくはやつたことがないが患者の癒つた例しは、見聞いた」

と家の者に云つた。

——私はその時それを聞くところではなく、日夜痛み通してさうなるかと思つた。結局氷で冷やして沈鬱してゐました。

が、その結果はさうともならない。

醫師は今度は「詮方ないから」切ると云ひました。「では之れから患部を蒸して下さい。化膿させませう。そして、今夜——イヤ明朝切りませう。止むを得ません。」

彼は家の者にさう云つて、蒸し方を教へて歸つた。

「昨日まで冷やして今日は蒸すのですつて、」

「フム」と私は思つた。さうとでもなれ。——それより痛さに堪へかねてゐる。「誰か此の痛さだ

けでもいゝから一時止める醫者はないかな。」もうイヤだ。癒らなくともいゝと思つた。

まるで足一步一寸動かしてもキズへ響いて聲を擧げなくなる。——私は苦しいよりも腹立しくなつて、コンニャクの煮たのをタオルに包み患部のまはりをやけごする程、一晚蒸した。蒸しづめにした。

蒸すと痛みがかなり無くなる。それで益々蒸して見ました。

翌朝はズクズク膿を持つてゐた。

○

その日はやつと車に乗つて醫者まで引かれて行き、局部麻酔を受けて切開されました。

私は一種氣分が喧嘩腰になつてゐたから、畜生！ 切れば癒るだらう、さう觀念して、別に療治を痛いとも思はなかつた。——結局グルグル巻きに繃帯されて午頃家へ歸つて來ました。

「痛かつた？」

「あゝ、だが大した事はない」

來た人が、「切れば癒るさ。痛みはそれでもう無くなつたわけだ」とあつさり云つた。私もその氣になつてゐました。

それから就床して氣を靜めて見たが、痛む。益々痛む。「切れれば痛くはなくなる」ではなく更に
ひびく痛む。

切られてから三四日程私は又一しほ「病氣」になりました。

醫師は毎日繃帯交換に來た。

「痛みますか」

「非常に痛い」

彼はけんな顔をしてゐる。

その中兎に角排膿出來て、次第に樂にはなりました。——ところが（あとで聞くと）化膿部に
對して治療のキリ口が不適當な爲め、膿は外へばかりは完全に出ずに、そのたまる重みで肉内を
通つて下部分へ別に、しこりを生じました。

「如何です。少しはお樂ですか」

或る日權藤醫師がかう云つて來ました。

「樂は樂ですが何だか別にしこりが出來た様す」

「ホホウ」お見せなさい、と云ふ。

彼はしきりに指でおしてゐるが、「膿孔が出來てこつちへ通つたのですな。それが然し又他へま
はると長くかゝる。」暫く考へて、「では明日一つ御無理をして宅へいらつして下さい。切りませ
う。又他へ（獨乙語）を起すといけませんから。」

彼はその日はそれで歸つたが、私はそれから不安になつて翌日は權藤へ行かず、起るとすぐ子
供なじみの芝の醫院へ送られました。

そして入院患者になつたのです。——既にそれから二週間になる。

○

私は權藤醫師の面影を忍ぶ。——すると悄然とした姿が見えます。彼は何彼に「熱心」である。
且「正直」です。そして「親切」で「人がいゝ」。只醫術は非常に出來ない。

「……私も四十×歳になりますが、こうして長らく鍼醫者をしてゐる權藤君。一つ奮發して南洋
へでも行かないか、と云つてくれる友人もあるのですがな、やあ、妻子があるとさう飛び歩きも
出來ませんで」

さう云つて私の腕に注射してゐたことがあります。

私は彼の拙さは變に感じてゐました、初めから。「だが何故それにも係らずかゝつてゐたのか」

それは私が丸で歩けなかつたのも理由の一つですが、もう一つには此の醫者で癒れば何よりだ、と思つた。醫者に同情心が起つてゐました。(然しその影に又今更醫者を代へるのがおつくうな気分もありましたけれど。)

初めて醫院へ入つた時、そこに先生用の丸椅子があります。小さな事務用の小廻轉で、私の所有のよりすと悪い。それに張布も所々々けてゐる。

「俺は一つ癒つたら禮にひぢかけのついた廻轉椅子を持つて行かうと思つてゐる」と妻に云ひました。

さう云ふ感じでついで人を牽く。

○

日記。四月十八日病中……何かを念じてもさうか癒して貰ひたい氣がする。心の千々に亂れて暗い時には全く地獄の淵に立つそのまゝの思ひだ。名狀しがたい。

あの劣等なる醫師にも時に神の手がのり移つて、よき方に——遇然でもいゝ——手當をしてくれる場合があれ。私は醫師をたよる他なく、今の醫師は悪く、然しそれを變へると云つてもさうしたものか、かう丸で動けず、且人だのみでは覺束なく、そして斷へず痛く、苦しいのだ。さう

かよき方に向いて下さい。

○

あとで聞くと、私が芝の醫院へ「さらはれた」日、權藤醫師は診察所を片付けて私の切開の用意してゐたと云ふことである。——従弟が夕方行つて、實は知り合の醫院があるのでそこへ行つた。あしからずと云ふ様なことを傳へて來た。

權藤醫師は「……さうなされば入院に越した手だてはない。その方が安心でせう」と——皮肉でなく——云つたと云ふ。

私は思ふ。——皮肉かも知れぬが——その方が權藤醫師も安心ではなかつたか。

「ハテ、かう云ふ都合ではないが、考へねばならぬが。痛みますか。此處も痛みますか」——なご、眞顔に思案して僕の患部を「苦勞」してゐたことがある。

それ等の感じは世にもたよりない、然し正直な、寂しい、本氣な又哀れな姿であつた。——餘り痛くない日には、それ故「あの醫者で癒るといゝ」とつい考へた。殊に外科病だし。

一人の娘さんは五つか六つの可愛い子であつた。時折り診察室へ——とは云へ平家の茶の間に隣る表六疊に過ぎないが——やつて來る。或る日私の治療をけんに見てゐる。

「……お嬢さん。汚ないものだからあつちへ行つてらつちやう」「私が云ふと醫師も。」ばつちいからあつちへ行つてらつちやう。「あつちへつてらつちやうと云つた。

子供は隣室へ行きました。

いゝ生活ではないと思つた。

私は従弟から彼が手術用意を備へて待つた話をきゝ、變に氣の毒になつて、手紙に「……家で不自由故入院の爲め此所へ移つた。が治療は先生のと大同小異だ。何れ癒れば元は先生が切つてくれた手術の爲めに違ひないのだから。」そのお禮心は忘れなないと云ふ旨を書いて出した。

——實はその手術口故に猶長引くのだが。

彼からは「委細御文通に接し（不明）然る上は十分御加養奉願候」何れ全快の上萬々申上げると云ふ旨の返事の端書が來た。

「然し俺からあんな事をかいて自分の療治が正しいなき、思ふと又あとくにいけないね」妻は「なあにいゝでせう」

權藤さんは何だか哀れだと云つた。

或る日私がびつこを引きく醫師から歸つて來ると、隣りの奥さんが「如何したのです？」と問ひかけた。

「足に腫物が出來たのです」

「それはお困りでせう。何所へおかゝりになつてゐます」

「權藤さんです」

「權藤さん？」

と彼女は投げて言つた。

それから妻が聞いて來たが、隣りでも子供が先生に誤診されて、まるで信用がない。

○ 「今日は！」

と或る日魚屋が來た。「さうです。旦那あ癒りましたか」

「いゝえまだいけない」

「権藤さんだつてね」
妻はうなづいたらう。

「へ、ありやいけねえ」

○

氣の毒な然し辯解のないへは醫者。

お互ひに困る。

然し醫者をしてないわけには行かなからう。

何か軽い病人ばかりを見る役か何かになるといふのだが。

私は癒つても、

彼は癒らない。

ひさくミゼラブルな又不當な、異様な感じがして思ひ出す。

(五月五日。赤塚醫院階上室にて置く)

矢田部さん

私に看護婦が一人附いてゐます。矢田部さんと云つて今年三十の未亡人です。自分の十年前に亡くなつた夫を「旦那」々々と呼んで、そのダンナの話が何度出るか分らない。「私は結婚もしたし子供も生んだし、旦那の見とりもしたしもう世の中の役目はすんでゐる。之れからはいつでもあの世へ行けばいいのです。旦那が待つてゐますからね」

主よ御もとに近づかん……その他讚美歌が好きらしく、小さい横赤ぬりの本を持つて來てゐる。「耶蘇教はい、ね。愛せよと云ふんですからね。私も旦那に別れてから、ヤソになりました。」時には、「あゝあ、傳染へでも派出に出かけてもうけやうかな。私はもうけてからテコテコ旅に出るのが何より好きです。松島はい、ですよ。R Mさん、傳染は日に三四回になるんですよ！」

「さうですか。然し危ないでせう」

「なんの、危ないことが！ まかりまちがつてうつゝて死ねば職にたほれたわけですからね」

「だつて君、死んでは仕方がない」

「死んではね。え私が死ぬと子供が困りますねえ」

「ねえKMさん。私の子供は淺草の伯母に預けてあるんです。ところがそこにバカ小僧がゐるね。Xちゃんはあれが本當のお母さんぢやない。あのよく来る矢田部の小母さんがお母さんだと教へるんですよ。そざだもんだから、僕には二人お母さんがあるのかなあ、變だなあて云ふんです。」

その子僧はバカですな」

「バカですな」

○

「ねえKMさん（聲をひくめて）今日から隣りへ入院がありますよ。松戸の村長さんですと。ところがトリツベルで大道樂の病人、ホホ、イヤになりますね。村へは東京へ用達しに行くと云つて毎度此の病院へ入るのですと。——あきれて了ふ！

私もそれを聞いてイヤな感じがしました。」

ところが翌朝、私が八時頃、目をさますととうに看護婦は起きてゐて、何か室隅から大聲に話してゐる。ハテ、誰と話すのだらう。

「XXさんその病氣はよくありませんよ。第一奥様にお氣の毒ですよ。……」
彼女は隣室患者と話してゐる。

あとで

「ねえ、矢田部さん。——隣りの人とおつき合ひするのはやめてくれませんか」

「あなたおきらひですか」

「きらひなわけぢやないが知らない人は一體餘り好きぢやない」

「その方が本當ですかね」

「さあさうだが」

「（聲をひくめて）あの人は今日靖國神社へ行きますよ」

○

「……昨日代診がねごまりして来て今朝院長に叱られてゐましたよ」

「さうしたの？」

「さつかしら變な所へ泊つたのでせう。醫者のくせにね」

私はつひ笑つて「醫者のくせには少し變ですな」

「變ですよ。あれぢや上達しませんナ」

それから何かつゞきをしゃべつてゐるたがいつか話題が變つて、何故女が女郎や淫賣になるのだらう？　と言ひ出した。

「それは色々でせう」

「好き好んで成るのでせうか、バカな」

「まさかさうではないでせう」

「あんなものがあるのはいけませんね」

「まあいけないが無くつてもきつといけないんでせう」

「まあ！　KMさん、困りますか」

「僕は困りやしないが又別ないろんなことがあるだらう」

それから話がひかれて看護に出ると、時折り悪いことを云ふ患者があつて困ると云つた。「小傳馬町の△△屋の主人へ派出に行つたことがあります。夜中に私がねてゐるといきなり財布を私にほうつて、云ふ事を聞くと云ふのです。それが爺さん！　まあ、タマゲたから私はトボケなさんナあ！　と云つてやつた。」

然しそれから猶交代をとらずに癒るまでずつとゐてやりましたが、その代り子息さんにも話すし若奥さんにも話すしみんなに話して、矢田部さんにあつては降参——ですと。爺さん頭をかいとる」

「それはまちがひがすい分あるでせうね」

「えええ、みんなまちがひます」

みんなまちがふは誇張だらう。

「KMさん。高橋さんは面白い人だつた。XX醫院の村上先生は看護婦を奥さんにしてゐられます。△△院の副院長はそれはうまうつせ」

然し少しもそれ等の國有名詞の話は臍に落ちない。

夜は早く、朝は又極めて早く目をさます。黙ると病気になる鳥の様にしやべり、然しママに實によく働く。私の所へ人が來ると、「貴君は顔色が悪いがさうかしやしないか」「貴君はまぶたがたれ下がつてゐるが腎臓ではないか」——とつい油断すると氣になることを、パツパと云ふ。

然しい、人である。私はキライではない。

花が好きで私の周囲をつまじやバラ、アネモネ、なでしこ等で飾り立てゝゐる。下宿の書生の机の様だが又、うれしく思ふ。花は美しいものだ。——或る時派出に行つて病人の枕元で紙で蓮花をこしらへて厭はれた、と笑つた。「私はさつぱり氣がつきませんの」

その一つ、つい昨日櫻紙でこしらへたバラと梅が、生花と一所にそこにさしてある。

「矢田部さん、戸を開けて下さい。——起して下さい。——水を下さい。——ココアを下さい。

——ねかせて下さい。……」

「ハイ、ハイ」と云つて一々してくれる。

○

私は彼女を忘れぬであらう。

要らぬ買もの

×月×日、——今日歸りには思へば變な經驗をした。指ヶ谷町の電車通へ出る、あの横町の五六軒目に先から一軒古道具屋があるのだが、前から植物園なきへ行くとよくのぞいたことがあり、はいつて見たこともある。只、一度も買ったことはなかつた。その主人がさう云ふ人も知らなかつた。

今日はそれをつい立ち入つて見て了つた。

あの家は一體哀れな家だ。それに汚ない。あるものと云へば全く役に立たぬカラクタばかりで、店中すつかりほこりを浴びてゐる。いつも今迄フトのぞき込んでも、はいつたことがたまにあつても、手ブラで引返したのはその爲めだ。いつもろくなものは何にもなく、凡て汚ない。

何でも古ほけた古錢の類にしたのが一つ店頭にいづ行つてもかゝつてゐるのが、あれがあの家の実にびつたりとした象徴に思はれる。……

今日もまあ例の通りが、りに何の氣なくあすこへはいつて見たのだが、はいつて突き當りの棚

に口の長い、近頃の支那出來らしい——何に使ふのか——小さな徳利(?)が一つ目に付いた。それは、丁度先月Aの家で見た、あれと殆き同じものである。

「それはいくら?」と店の奥へ聲をかけて、同時に右の方を見るとそこに曲がつたくろい桐の箱にはいつて、同じく支那焼の龜のつ手の付いた蓋物たてものがおいてある。まるでゴミだらけである。然し一寸さうかすると、靜物にはなる。

僕はまだひやかしを通り越さぬさうでもない、氣分で徳利や蓋物を試てゐると、奥からは老婆が出て来て、「その徳利は小さいが品がい、から六十錢だ」と私に云つた。

「ではこの蓋物の方はいくら?」

「そちらは」圓八十錢です」

「まあそれは貰ふが」と僕は小さい徳利を手に持つて云つて——然し云ひ値より兎に角負けさせる氣があつた——それから、殆き出來心に。

「ねえ、此の蓋物と徳利とで二圓にしておかないか」

さうすれば兩方買つて行く、と別に執着も何にもないことを、さう一寸思つたのですぐそのまま店の老婆に軽く云つた。

老婆がその時かう云つた。

「ハイ、今は何しろ一圓お金があれば一圓五十銭にも當る時ですから、さうお願ひしたいのです
が……」

……わたしは初めから安く云つたからそれより負けられない。それから、丁度今「ぢいさん」は
留守でわたしだけだ、と云ふこと。ぢいさんなら一方をいくらに、こつちはXXXに云ふだらう……
「……ごうも冷へてねてゐる」

そんなことを縷々と言つた。熱心に。その聲は低く、イヤに實感から出てくる。(くれの押しつ
まつた或る午後である。)

私は老婆を見た。——頭髮が白く、やせてゐる。殊にその膝へおいた手なきはカサカサで(自
分は何故こんな悪い連想をするのか! 然し)そのまゝ死骸に付いてゐる手の様だ。

家の中も見える。六疊一間である。暗く、猶暗い色の荷物が愛鬱につまつてゐる。真中に長火
鉢があつて湯氣が出てゐる。その奥にほんやりと、クナクナに丸まつて何しろ「布團が敷いて」
ある。

老婆はそこから今出て来た?

私の聲をきいて——

——かうして、私なつい何時かあの家の「人」とつき合つて了つた。

二

私は只何の氣もないひやかして此所へ通りすがりに寄つたのであつたが、でつい今しがたまで
さうだつたが、縷々老婆の云ふのを聞き、その邊を見てゐる間に、例へば寫眞のピントがカチと對
象へ合ふ時が来る様に、私にありありと老婆や此の家、そのあり得る背景、生活、少くとも或る運
——なきがギシギシとよく見えて来る。見まいとしても向ふから見えて来る。私はかうなると、
時に、此の老婆にとつて強ち路傍の人ではないのである。寧ろ、路傍の人ではゐられなくなる。
氣の毒な、變な、情けない感になる。「同情」である。只同情はいゝとして、だから僕が此の人
にその思ひをさうすればいゝのか。

買ふのはやさしいが……

それより、今僕が此の人から物を買ふより先きに變に水の様にしみ込まれた、此の思ひを一體

さうすればいいのだ？

私は——僕は無力で自己一個主義者かも知れぬ——何しろ、この二品を買つて兎に角此所を逃れやうと思つた。辛い情けない暗澹たる氣がして、此の場はやり切れぬ。

(實はさう云ふ感じは好んで私は感じたくないのだ。)

「之れを二つ買ひませう」と私は云つて、財布を出した。一圓八十錢に六十錢——見ると財布には細かい金がなく、十円札しかない。

「さあ。十円でツリがあるかしら？」「細かいのがないのだが之れで」兎に角、私はその札を老婆に渡した。

彼女は案の定弱つた顔をしてゐる。

三

私が「買ふ」のは、實のところ、早く此の場を去りたいからである。買つても老婆の運や生活に何のたしにならう。くらしのしのぎには一時なるだらうが、——そんな事も如何でもない。私に

はあなたの刺戟が、只辛すぎるのだ。「不人情」と云ふ様な字に當るだらうか。さうしたら「許して」買ひたい様な氣がある。人情不人情より、私は此の老婆なりその背景が寧ろこはい。成る可く見たくない。それは私には全く「見る」は見てもそれ以上さうしても出来ないもの、只かくの如く辛く思へるだけである。

早く買ひものをして此の場をせめて逃れたい。私はさう云ふ「悲愴」を感じても、然し主観客觀とも結局さうにもならないのだから。

老婆は私の札を見て困つた顔をしてゐた。

が——私にはわかるのだが——彼女は困りながらも二つ云ひ値で(?)賣れる「喜び」が見える。それを買ふ然し私の心持はこんなところから來たか、不幸な老人よ、私はあなたに無論同情もするしいろくお察し出来る。然しそれ以上に私を刺戟する陰鬱な影がさうもあなたのうしろに見えて、それが私を打撃するのだ。

あなたは知らない。

只さうか私が兎に角此の品を買つて、此處から逃げやうと思つてゐるのを、別にあなたに云ふのではない、然し世の何かよ、許して下さい。——

彼女は、「本當に細かいのがなうて」、なうてと云ふ様な品のあらざらしい言葉で云つた。「細かいのがなうて困ります」。隣の人に頼んで代へて貰はう、と私に言つた。

「一寸此所にお待ち下さい、」何でも、茶がないから角の葉茶屋へ何とかを四半斤買ひに行つて貰はう。さうすればくずれると私に云つた。「くれで忙しいし私のところはこんなもの——（非賣用品？）——ばかりなので、買ふ人がなく」小使ひもないのだ、と私に云つた。

私は「さうだらう」と——さすがかう露骨に云はれるのに又目を伏せたく、然しいろく困るだらうと本當に思つた。「何しろ此所で俺が買へばたしかに何かしらにはなるのだ」——と思ふ。

彼女は札を私から受取り、それに風呂敷を添へて、勝手口から隣りへ行くらしい。やがて、店の前——つまり往來——を、右隣りからチョコマカ十二三の女の子が今の風呂敷片手に、道具屋の店へはいつて來た。——そこは半分土間である。

「お婆さん。XXを四半斤つて言ふの？」

「さうだよ。お世話さま、今此のお客様が買もので……といそく、使ひの子に私のことを説明した。女の子は忽ち走つて出て行つた。

四

私は老婆と二人になつた。一寸手持無沙汰である。女の子の出て行つた往來を見ると、やんはり日が當つて、時々人が通る。のさかに。——俺は變なところへ變な風に引か、つて、あの平和なのびくとした往來へまだ自由には出られない。之れは思へば變な始末だ！ フツとおかしなとりとめのない氣がする。

老婆は相不變奥の上りがまちにゐるが、——何々様の自動車が毎日前を通つて、こんなに砂ほこりを浴びせます、と笑ひながら云つた。何しろその品物、棚、凡て店のうちの汚なさ、むせる様なほこりは、ひさいものだ。私はい、かけんそこにあつた角椅子にそこにあるので別に氣にもせず、腰かけてゐるが、もし上等の身なりなら、さうかなるだらう。

老婆はツとかゞんでそこにおいた私の買もの——蓋物を見て、「大變よこれてゐる」、洗はうと云つた。

俺は「それには及ばない」と斷つたがしきりに洗ふと云ふので、彼女に渡した。——彼女はそれを持つて奥の臺所(?)へ洗ひに行つたが、後ろから見ると腰に何か、感じられぬ色の小布圍を

吊つてゐる。

間もなくテカテカに洗つて持つて来たが、私に渡す時、とつ手の龜の下にまだ一かたまりほりがかくろく残つてゐる。それを急いで袖口でふいた。

窮屈な二三分。

——彼女はそれから、「あなたに見せたいものがあるのです」と、私がすつと黙つてゐるのを殆んぞおしのける調子に、切口上に云ひ出した。ある皿があつて、それは極く古いものでいゝ品だと云ふことだ、それが前から家に一つあるが、さう云ふものはたまにしか出ないので他には今別に見せたいものもない。

「さう云ふ品——（私の買った）——を好む方には向くかも知れない……」

「何です？ゴスの皿ですか」

と私は受けこたへに只聞いて見た。え？ と彼女は云つたが、「お目にかけてませう」と云つて、立ち上つた。——私は別に見たくもない。然し立ち上るのを止める氣にもなれない。

老婆は暗い奥の棚から皿を一枚とり出して、しきりに拭き、

「何でも中々いゝ品ださうです」さう云つて私にそれを示した。

成程、品はいゝ皿だ。裏に「大明成化年製」と書いてある。が年號如何は第二として、兎に角生地もよく、ゴスもいゝ。はたて貝になぞらへて作つた大形の皿で、細かく中に飛び模様が描いてある。——只その模様が全體の形ちとちぐはぐで、皿の「美術品」とは殆き氣に入らないが、私は左見右見それを見て、老婆に、「これは賣りものですか。——いくら位ゐるのです？」

極く軽く話しの突差のつなぎに、聞いて見た。

「二圓だ相です」キズがないともつといゝ、値に賣れるのだ相ですが——

そこへ、使ひの隣りの子が威勢よく外から歸つて来た。

五

私は間もなく歸るのだ。あゝ、變なつきあひ。然し老婆の影から見えたものはいつか私からさう際立つては見えなくなつて、私は安氣に感じ、彼女にある親しさも感じたのである。一度は私がタバコを出したのを見て、マッチをすつてくれたことがある。それは氣の毒な見知らぬ道具屋の老婆でも誰でもなく、樂に親しめる、或る年とつた「人」である。私は禮を云つて火をつけた

が、それから、何かしらまとまつて、はないが、彼女と話した。

屢々私も彼女も一つで、その時には賣手と買手、氣は樂でそれが自然だ……

私は品物をまとめてもう立ちかける用意をした。

彼女は隣りの子から風呂敷を受取つて、やさしく禮を云ひ、それから丁寧に包みを明けた。中からは細長い茶の紙包みと、キッチンと重ねた五十錢札の「ツリ」が出た。——それをかんで一枚一枚数へてゐる。茶はいくらだか、それだけ足りなくなつてゐるだらう。

「若しもあの札の數だけそつくりみんな今此の人のものだつたら、猶兎に角い、だらう」とフツと思つた。

「これで七圓六十錢あります。お改めなすつて」と、彼女が私にそこでツリを差出した。その方が彼女のとるより見るだけでカサが多い澤山のツリを。

「……」私は何だか此の金を持つて、その上に兎に角何かしら役に立つ品物を持つて、此所が出るのが虫がい、様な氣がする。と云つて癖か、常識か、金が入らない感じはしないし、突嗟に、「あの、その皿も買つて行きませう。」見たのだから、「それだけその中からとつて下さい」と彼女に云つた。

(まあさうすれば金は半々だ。尤も俺の方には代りに品物がいろいろ来るが、——これは文字通

り當り前のやうでもあり、まあ持つて行つてい、だらう。少し判断がしきろもきろだ！)

彼女は喜んだらしかつた。で、又綿密に金を數へ直して、「ありがたう存じます、ありがたう存じます」と二度云つた様だが、チラツと物好きに、人に禮を云はず様な聞くに不本意な感じがした。「俺は何しろ少し變テコにこじれて來てゐる！」

彼女は「……十錢だけ御愛嬌におまけにしておきます」。でちやんと揃へた小札を俺に手渡しした。

「や、ありがたう」然しこのありがたうはとつて付けの出まかせな氣がして、それよりももうかうなつたら早く歸りたく、老婆は(多分)俺が急ぐので器物を三つグナグナの新聞包みにしてくれた。猶ひもで結へやうか、と聞いたが俺はそれを斷つて、とう／＼之れで變な要らない買ものを荷に背負ひ込み、あくせくその家を飛び出した。

**

「何だ！ 此の買ものは。」此の買ものは！ 一體何がさう買つたのだ、變だ！ 私は道で度々さう思つて、さすが苦笑した。

老婆やその「影」のことはその時心から消へ失せて、無性にとほけた、間の抜けた「滑稽なさぞ
それは家へ歸つたら笑はれることだらう」あきれらだらう、體裁のわるい、弱つた感じがする。
荷のもちにくさ。「俺はさうかすると少しオカしいのだ、」が本氣だ。

それから「少し損をした」と思った。——然しするとあの老婆や今迄眼前のこと、経過した氣持
なき、すうと寒く、通り魔の様に私の心をかすめて、結局私はため息に似た鬱した氣分で、午後
おそく家へ歸つたのである。

.....

或る町筋

.....

…君は池の端七軒町と云ふ町を知つてゐますか。そこには狭い町筋に兩門ともすき間なく似よりの商家が並んで、私が偶々通つたのは夕七時かれこれでしたが、あたりは何となくはしやいでゐた。いつもさうだらうと思はれる——

天ぶら屋はおそく迄しきりと仕事をしてゐる。藤田と云い米屋ではわらを揃へてゐた。その前に自轉車のサイド・カーばかり修繕する餘り見かけぬ商法の家がある。家中殆ど土間になつてサイド・カーの車臺から外したものが——つまり外わくだけ——線が紛糾し合つてそこに立てかけられ、何か光りを用ひてカナ棒を赤熱し、男が丁字の曲り目のところをしきりとつないでゐるのを見た。

加納屋と云ふ竹屋にはガス燈にうるし(?)で線がきの竹の模様が入つてゐて奥行の深い赤暗い家の中では、老人と子供が板の間に竹細工をしてゐる。

となりに麩屋がある。傘屋、下駄屋、印刷屋、雜貨屋、米屋……と軒を並べ、米屋の前には小魚の一錢天ぶらがあつて、私がおの前の前を通つたのは丁度飯時と見え、父親が子供に天ぶらで御はんをおたべと云つてゐた。——そのわきに共同水道があつて、小暗い片かけにおかみさんが蛇口につかまつて水を汲んでゐた。

ピステット屋には製菓會社の安ピステットが山と積んで仕切りの箱に入れてある。隣の齋藤運送店には店内に縄がこれも山と積んである。つくだにや、日の出饅頭、やきいも屋と過ぎて、小林商店は、見てゐると主人が人形をこしらへてゐます。

打綿屋、たゝみ表製造業、荒神様のお宮を商なふ店、この店は又別に見たが板じきの一方の羽目にはずらりと各種の鉋、鋸、その他の金物の道具が整然と一列にかけ並べてある。——坂井といふ古道具屋には、場所がらで油繪の自畫像(?)がある。誰が描いたか、色のわるい長髪顔が白の襟巻をして正面を向いてゐる。下の方に立たかけてあるのです。

その前に鍛冶屋があつて、丁度休昌院と云ふ寺の隣となり、鍛冶屋は暫く見てゐるに、土間へ一段落して四角の穴に火をたいて、子僧と親方とが眞黒のまゝ赤熱の棒様のもをかたへのカナ床におき、打ちおろしてゐる。——柔かさうな赤いかねが打ち下される度びにツシンと非常に手ごたへがあるので、妙に見てゐて飽きません。——町筋は間もなく盡きて、そば屋になる。根津名物おかめそばはスリ硝子の行燈がかゝり、別に夜警小屋が出来てゐて一杯子供が遊んでゐます。——家へ歸つてから地圖を見ると、根津の大通りから西へ折れ込んで今云ふ七軒町の廻りへ出、その五十三番地のところで、又鍵の手に西へと曲つて淺野さんの邸へぶつかる。

その所です。行つて見玉へ、景しきに生活とかくらしがまともにほの見えて刺戟的だ。然し少しも不幸と云ふ種の暗さはなく、極動勉だ。快活で、元氣だ。おし黙つてゐる印象を受けるがそれは必要以上に富有だと云ふわけではないせいだらう。——今行つて歸つて來てから思ふと、鍛冶屋の音なき聞え、或る油のほひ、細い管からしゆうくほとばしる光りもの。それ等が暗く狭い通りにつまり、町筋に愛情を感じて、生きた記憶にのこる……

十一月下旬稿

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字が並ぶ）

愉快な旅行ご當てなき散歩

一編は大正七年のこゝ、もう一つは大正八年のこゝを書きました。
共にその當時書いた手元の原稿を用ひましたが、元より以前のまゝ
では使へませんでした。（作者）

愉快な小旅行

——だがあの馬車馬は氣の毒だ！

一

之れは大正七年十二月末の話である。僕と僕の弟と横堀とで、約束して、三崎本瑞寺にゐる宮崎の所へ行つて見やう、と思つた。二十六日に行くつもりだつた。僕のつもりでは、三崎へは前に二度行つて見たことがある。二度とも忘れぬいゝ感じを受けた。それで、宮崎がゐるのを機会に、又行つて見やうと思つたのと、丁度年末にぶつかつてゐる。一寸旅行して歸つて落付くと新年が来る。その感じも後の生活の上にいゝと思つた。それから、今年十六の弟がまだ一度も海を見たことがない。海を見せてやりたいと思つた。何しろさう云ふわけで思ひ立つて行くことにな

つた。横堀も大賛成で歸國をその爲めに延ばした程だつたが、これは餘談が過ぎたかも知れない。所が一體三崎へは船で行くのが願ひなのに、その船は朝七時に出る。一日一回だからそれにおくれると丸一日ちがふ。それを二十七日の朝、我々はねすごした。僕が一番先きに目をさまして、時計を見ると七時半だ。「オイ、七時半だ」もう駄目だと云つた。

實は二十六日に立つ筈で二十五日からテツ夜で待つたが、丁度大雪でその日は流れた。莊十三（僕の弟）は朝四時頃、三四寸つもつた雪の中を現に盛んに降つてゐるのに、空の何所かに若し星が見えないかと歩きまはつた程である。——まあ、止むを得ない。明朝もし雪がやんでゐたら出かけやう、と云ふ筈にしてゐた。家中で學校ゴツコをしながらテツ夜をした。然し雪はやまなかつたのでつまり一日のびになつた。

明くる二十七日、僕が床の中で「もう駄目だ！」ねすごしたと云つて、少しヤケになり、そばにゐるみんなを起した時分には上々の好天気で、實に落膽した。横堀はまだねほけてモグモグ云つてゐたが矢庭に飛び起きて時計を見に來た。莊十三は僕の聲をきくと逆に床の中にもぐり込んでシクシク泣き出した。その情けない聲！——一體ねすごしは、然し莊十三の責任問題になるわけなのである。莊十三が我々を起す約束だつた。それを前夜宥衛して一時過迄ねられずゐるた爲

結局寢坊の僕に起されて見ると、もう一時間ばかりおそかった。

莊十三は全くがっかりして泣いてゐた。泣きね入でもするのかと思つた。絶へて起きやうとしない。すつかり力ぬけして了つたのであらう。

僕はなんの事だ、と思つた。もうやめだと思つた。起きないで床の中で不快を感じてゐた。然し段々頭がよく(?)なつて、元氣が出て来ると、イヤ然しまだ行つて行けない苦はないと思つた。このまゝやめにしてはつまらぬと思つた。(もう一日出發を延期するわけには、横堀の歸國がその先に控へてゐるしすぐ元日になるのを感じて、出来なかつた)行かう！と思つた。汽車で行つて汽車のない所は歩けばいい。陸路で三崎へ行くいゝ、經驗になる。三崎は好きだし之からもよく行くから、今日一つ陸路で行く經驗をしてやらう、それがいい、非常に。

「汽車で行かう、汽車で。今日行かないと氣持が悪い。」と口に出して云つた。みんな果して賛成した。殊に、莊十三は大元氣になつた。汽車がなければ歩く位いの顔をして、それから改めて支度にかゝつた。長い妙なパンを朝メシに食つた。

九時頃、我々は家にはマス子(僕の妻)を留守居役において本郷を出發した。——マス子は舟がいやなので一緒に行かないわけになつてゐたが、汽車で行くことになつても矢張り「では行か

う」と云ふ突差の氣にはなれなかつた。然しかすかに行つて見様かな、位るには思つたかも知れぬ。僕が床から半起きでマス子に汽車だから行つて見ないか、と誘つた時には、莊十三は「よう行きませう」行きませうとせき立てた。

彼女は一瞬黙つてゐたが、「まあ三人で行つてらつしやい。」之れから行くと云つても私は仕度に暇がかゝるし、大變だ、と云つた。——それもさうだと思つた。泊る豫定だし。

さうなると一寸残念ではあつたが。

*

*

*

*

何と、うらゝかに晴れたらう。

横須賀驛へは十二時頃に着いたと思ふ。トンネルを出ていきなり軍港が現はれた時には、驚いた。僕はポケットと云ふバカ本に耽つて讀んでゐたが、いきなり軍港が現はれると莊十三は僕を引張つて、「ホラ」「ホラ」と云つた。非常ななぎだ。海はまつ青で平らでそこ一面に軍艦や驅逐艦がぎつしりつまつてゐる。驚いた。

横須賀の町で出會ひ頭に、之れから三崎へ行く道をきいた海軍の人が大變親切だつたので、幸

先きよしと思つた。その人は歩調正しく歩いていろく道筋を丁寧^{ていねい}に教へ、眞面目に何の爲めに行くか、何所から来たか、と云ふ様な質問をしてゐたが、ある雜貨店の前を通ると、そこには低く、店先きに日よけが白くおろしてある。それを腰をかゝめて一寸指先きでかゝけて、中をのぞき、「よう！」と云ふ様なことを云つた。不調和な變な氣がしたが、又好人物だと思つた。

横須賀の町は一番おしまひに（それともわきへそれたのか？）だらく坂になつて、海が現はれた。尖つた島が矢鱈に海中に浮き出てる。海岸に赤い腹の船が一般、あつた。

そこでガタ馬車を見付けて、存外安いで浦賀までのることにした。

八人つめられて窮屈で弱つた。横堀と莊十三は御者臺にのつた。僕は車のあとの方へ横に座つて後ろの景色を見てゐた。それで一二町グラグラ走つた。

二

初めは後ろの景しきばかりに氣をとられてゐたのでまあよかつたが途中で、立場^{たちや}があつた。馬も代るし序でに車も代ることになつた。僕はもう後ろは窮屈でこりたのですぐ飛び下りて此度は最先きへ腰かけた。相變らず横堀と莊十三は御者臺にのつた。新規の馬がやつて来たが、横腹へ

馬車の棒をつけられながらボタバタ糞をした。まともにそれを見てゐたのだから變だ。——よく出ると思つた。

その中、用意がすんで歩き出した。此度は馬を見てゐた、時々御者は軽くムチを當てる。すると馬は少しづつ、早目に歩く。段々に早くなる。馬車は揺れること非常なものである。馬は脊中に輪カンが三つも四つもあつて、それにゴタゴタに麻ひもや革紐がアヤに通リ、兩脇に棒がついてそれ等がガタガタ身中でゆれて、走る。

僕は見てゐたが二三町行く中次第に氣の毒になつて来た。身につまされると云ふ様な感じだ。之れは氣の毒だと思つた。馬はモヂヤモヂヤの濃いたてがみを振つて、首を右左り、右左りに打ち振り、（それが誠に可憐である）走る。肩の所に山形のものをはさまつて、ひもでも棒でもみんなそいつについてゐる。その山形のとんがり首を振るたびガタゴトゆれる。これが俺についてゐるからかう重いのだ、もつとうまく樂に走れる筈だがこの肩が邪魔だ、と云ふ風に。

馬は首を振り、力をつくして断ける。ガタ馬車はそれにつれてゴロゴロ前へ出る。このやせ馬に離れまいとあせる魔もの、やう。それに我々が重く又乗つてゐる。

馬は少しも休まずに引張つてゐる。時々御者にぶたれる。もし御者がびしつとぶつたら後のか

ら肘をおさへてやらうかと思つた。幸ひ少しづゝしかぶたなかつたがぶつ度びにイヤな気がした。あゝ！こんなものに乗つたのは大失敗だと思つた。實に氣の毒だ。足がモズモズして汗をかいた様な気がした。こつちは別にまだ疲れてもゐない。實に氣の毒だ。歩けばよかつたと思つた。始終首を左右に振りながら駈けてゐる。あれであとで如何なるのだ。氣の毒だ。馬車と云ふものは一種間違つたものだと思つた。もし平氣で馬車にのつて歩ける人間があれば稍人非人だと思つた。こゝに座つてこの馬を見よ。實に氣の毒だ。乗つたことを後悔した。困つたと思つた。馬の首を見ると苦しかつた。まだぎの位ゐる乗るのか知らないが弱つたと思つた。いゝかけんで休まなにかと思つた。

往來を犬が一寸横切らうとして、馬車が行くので立ちぎまつてキヨロ／＼してゐる。可憐に思つた。何と云ふ幸福な奴だらう。この馬は又實にひさい。犬は小さいのに馬は段ちがひに大きい益々氣の毒である。

馬車馬の様に働くと云ふのが此のことならそんなことは世にもたまらない。馬車馬の様に働いたら生活は地獄だらう、喜びも何にもないだらうと思ふ。あゝやつて首を振つてかけて、又向ふから首を振つてかけて返つて、ねて、それが一日で又明日同じことだまるか。誰がこんなバカ

な商法を考へたのかと思つた。馬にも平和なのがある。この馬は何と云ふ不幸な馬なのだと思つた。氣がるには聲もかけられない。馬に氣が引けてこつちが却つて自信がなくなる。僕達は歩く可きだつた。又こんなまちがつた仕事はなくなるのが何れ本當だと思つた。

鐵道馬車がなくなるのは驢ろにせよみんながこの感じを感じるからかと思つた。感じないのはうそである。

弱つて目をそらして街の方を見てゐると、ある家に紙がぶらさがつてゐて「馬肉切賣」とかいてあつたのでぞつとした。

馬車は結局大失敗だつた。

漸く浦賀へ着いた。車からおりても變だつた。「馬でひさい目に逢つた。あれはたまらないね」とYに云つた。Yもイヤな顔をして「Kさんはあの前の馬を見なかつたからまだいゝのだ。あの前の馬は實にひさいかつた。二度目の馬と代つた時には、二度目の今の馬に、君は丈夫でしあはせだねと云つてゐる様だつた。」と云つた。それはさぞひさいかつたらうと想像した。Yは始終御者臺

で成程たまらなかつたらう——Yがしかめつ面をしてゐるので一寸滑稽を感じた。「君は御者だからな。」とからかつた。「然し二度目の馬はがつしりしてゐて悠々と走つてゐるから面白かつた。」と云つた。

「本當にあの前の馬はやせてヒョロヒョロだつた」と莊十三が云つた。

馬の話をしてゐる中に道が如何したのかわからなくなつた。

子供がゐた。三崎へはさう行くのか、ときいたがげんな顔をして立つてゐた。その前の家の人が大きな聲で教へてくれた。僕達は話ばかりしてゐて海軍の云つたのを忘れてゐたので、つい渡る橋を渡らずに通越し、少しわき道へ外れたのである。

*

*

*

*

それからひさい目に合つた。女が來なくてよかつたと思つた。三崎まで四里(?)の道を、やつと夜までかゝつて歩いたのである。へトへトに疲れた。その道はたしかにいゝ道で亢奮もしたし元氣で歩いた。又驚いた、然し何しろあとの疲れがひきかつたので今思ふとその感じが濃く、三人共黙つて只歩いた。チリチリした苦痛の感じが先きに立つので景しきも何もなかつたのである。

つくづくイヤだとくさくさ思つた。腹を立て、歩いた。情けなかつた。

夜八時近くやつと本端寺本堂を暗い中に見つけて、外から宮崎！と聲をかけてると、少ししてくらやみからKさん？と宮崎の聲がした時にはホツとした。高いエンに腰かけて、宮崎は頻りに上がれ〜と云つたが上るにも何にもぐつたりして、もう之れで何も彼もよくなつて了ひ、ボンヤリした感じは、異様であつた。僕は靴をはいてゐるが、實に靴はイヤだ、不適當だと思つた。それから少し靴をはくのがこはかつた。

四

宮崎の家へついたので前には前に書いた。

何しろ僕達は腹がへつてゐた。横堀は殊にひきかつた。少し宮崎の室で休むとちき外へ出る。こゝにして、暗い街で天さん屋へはいつて温かい奴を食つた。かなり待たされたが倍にうまかつた。待たせるので腹を立て、Yと莊十三は火ばしで火鉢のふちを右左りからコツコツほじくつてみずの様穴を掘つた。その穴が右左りからまんなかへ來て、まだぶつからない間にフイに女中が來たので二人共あはてた。

三崎の海岸で北極星を見た。

それから室へ歸つてねたが、本瑞寺へは街から細かい危ない石段を七十八上らないと行かれない。疲れて。もう腹もよくなつたし、天井屋の歸りに湯にもはいつた。石段は大儀である。

宮崎の室はガランとした本堂の隣りの八疊である。建築中でまだ天井がない。電気は五燭なので上を向くと暗く、何かおひかぶさつて来る様に思ふ。宮崎は此所に一人である豪傑である。

あくる日見たが、すぐ隣りの本堂には骨壺だの無気味な佛像だの椅子だの、木魚、鐘、變なものがゴソゴソかたまつておいてある。もしも夜一人である、あの佛像のことを一寸でも考へたら閉口だと思ふ。尤も豪傑は考へはしないが。

僕等がつく前に、宮崎は外から室へ歸つて来てフト室へ入らうとして何だかいつも自分の座る火鉢の上に、自分の片そでが火にあたつてゐるのをたしかに見たと云ふ。驚いて障子をあげたがゐなかつた。

そこへ外からいきなり宮崎！ と呼ぶ聲がきこへた。之れはメイドの迎ひかと本気で思つた。

——その聲はまあ僕だつたが、僕はその時横堀を待つので寺の庭のくらやみに立つて煙草をのんでゐた。宮崎は室から出て来てしばらくその火を見てゐた相だ。それから聲をかけて、初めてお

互ひにわかつてやあ〜と云ふことになつた。

夜は疲れてねた。雑談したりコーヒーを呑んだり菓子を食べたり、ハガキをかいたり、いろいろであれでも十二時頃、ねたらう。翌朝は七時に起きた。朝メシは向ふでやることにして、パンを買ひ、大元氣で渡しを渡つて城ヶ島へ行つた。

城ヶ島はい、所だ。その一端の崖は非常なものである。が、そろ〜頭がゆるんで變だからのんきな事しかかけなくなつてゐるが、宮崎は城ヶ島のはぢか何かへ「リキユウネズミの雨がふる」と言ふイヤな歌を歌ふ。

燈臺の下は岩だらけでダンテの地獄だ、と云ふことにした。尤も此れは先に此所へ来た時、俄がさう思つた。燈臺へは順當の道をやめて、直下から山をよぢ登つて上らうと思つて上つたところ、又自づと下りる様な道になつて三人共大變けはしいがけを下りた。切角上つたのに又下りたので頭の上の燈臺を見上げてボンヤリした。然し丁度此度下りた所は「地獄」の反對の海岸になつてゐて、貝があるので、それを拾つた。

中に市ハシに似たガイコツに似た小さな貝があつたので市ハシにあとで渡すことにした。改めて燈臺を見物。

それから又渡しにのつて三崎町へ歸る。僕は城ヶ島でタコ壺を買つた。十年海の底にない之れ程には貝がつかぬさうで、中々いい。

横堀はタコが此の壺へはいる時の心理やその形のマネが中々うまい。

城ヶ島で雲間に、いきなり富士が朦朧と現はれた時には、崇嚴な氣がした、帝王が現はれた様である。島の山や岩や海は家來の様だ。頭を下けてゐる様に感じた。美しい。

本瑞寺へ歸つてビールめし。實にうまい。少くも五杯は食つたらう。Yは何杯やつたか知らない。あゝうまいと思つたらおはちがカラだつた——之れはうそだが、何しろその程度に。

少し休んで、

それから油壺へ改めて出かける。油壺には三浦道寸とかいふ人が馬にのり、鎧のまゝ沈んでゐて今でも水底にユラ／＼ゆれてゐる——と云ふことを千家や何かへハガキで知らせる。或は道寸はタコ壺をかゝへてゐるかも知れない。Yはこの壺へはいるタコの眞似とその心理説明が得意である。

油壺へは然しゆけずに「かう云ふ感じだ」と云ふ所で休んで、向ふを見渡す。實に靜かだ、喧嘩してゐる人間を二人こゝへつれて來たら自づと仲なほりするだらうと思つた。

歸りに豆イタとヨーカンを買ふ。それを食ひすぎたので夕飯は進まない。いろ／＼話してゐる中に寺のおだいこくさんが、皆さん舟におくるといけなと告げに來る。一時にあはて出して(残念だつた)汽船發着所へ行く。然し實はまだ二時間程間があつた。

そこで又火鉢を圍んで話す。

やがて舟が來る。

宮崎はすぐ山の本瑞寺前へ引返して提灯をふる手筈にする。(それは舟で横堀は見たが僕には見えなかつた。)

海上は極めて平温であつた。カンパンの船室へはいつて、ねて、目をさますともう鯨岸島へ着いてゐた、——とかける。

朝三時なので少し早くつきすぎて弱つた。又そこで休んで、五時頃出て、永代橋ぎわで一ぜんめし屋へはいる。——計らず刺戟がありすぎて、飯がよくのぎへ通らなつた。全くおかずなしに飯を三杯、九錢食つて、そのまゝ、仕事にゆく(?)人があるとは!

それから本郷へ歸つて來た。

くたびれた。

(大正八年一月二日の稿を用ゆ)

ペン軸と古本

今日正午頃、齒醫者からの歸りに、電車が神保町を通る時フト思ひ付いて水道橋そばの古本屋を見てゆきたいと思つた。それで本郷行の切符はやめて春日町廻りののりかへを貰ひ、そこで下りた。

然しあすこで下りるとそのまま、すぐ巢鴨線へのりかへて水道橋へ直行するのは、物足りなかつた。まだ時間も早いし少し醫者にいちぢられて齒も氣持悪い。すぐ歸つても仕事は出来ない。それで水道橋へゆく前に、乗りかへ切符で少しあの邊の古本屋をも見て廻らうと思つた。

それと昨夜以來僕にあつたもう一つの妙な考へが頭に浮んだ。それは一本ペン軸を買ひたい——と云ふよりは探したいことだ。

近頃萬年筆が折れて了つた。それで普通のペンで書いてゐるが、それも一本大切なペン軸が口金が腐つてボロ／＼である。書いてゐるとペンが浮き出して、フラ／＼紙の上ののたうち、又は

インキ壺へ落ちて了ふ。その感じの悪さ氣持のわるさは、丁度僕の浮き上つた齒の様だ。是非之れを一本買ひ代へないといけない。

それはアツキス印しのフーパー會社製で極く太い、丸いイモの様な肥つた草色の軸だ。僕は勝手にイモペンと云つて愛用してゐるが、文房具屋ではだるまペンと云つた。多分十年前に、中學校の文房具出張店で買つた、あれが之れか——？

一體僕はペン軸道樂で、太いのや細いのやコロツプや三角形やフリキの付いたのやゴム巻のや、青赤黄色白黒、殆んご大ていの軸を持つてゐる。それをザラザラそばにおき、されにも新規のペンを差して、字の仕事なさする時には手の感じであつちこつち持ち代へ、より取りに使ふ。コロツプの後にブルキ巻きを持ち、又は極く細いのに代へ、急に太く短い重いのにとり代へる。それが字をかく感じをいろ／＼に變へながら却つて氣持を一貫して、大變都合がい。且手も疲れない。之れは中學時分からの一つの癖だ。

その中でもイモペンは一番太く、長く、重く、或る感じの時には是非無くてはならぬ、僕の必需品の一つとなつていつも手近かにあつたのである。

然し此の一二年は、人から萬年筆を一本買つて、つい書きいゝのでそれに馴れ、ペン軸の群れ

とは疎遠にしてゐた。所がそれが近頃クナクナになり、ペンの尖端がはじめてしまひに折れて了つた。それで近頃は又普通のペンに返り、イモペンを欠かさず愛用してゐた。

それが急に役に立たなくなつたので字をかく度びに氣にしてゐた。——實は昨夜も思ひ立つて本郷通りの文房具屋へ買ひに出た。所が知らぬ間にペンも時代が變つたと見え、新陳代謝し、いろいろ形ちは變つたのがあるが肝心のイモペンだけは無い。何軒尋ねても見つからない。ある文房具屋は僕を笑つて、「あなたの探すそれは極く昔の流行で今は誰も使ひません。A、Wのだるまペンと云つて、さあ、多分裏町の小さな店でも探して昔の賣れ残りがあれば、あるかも知れないが」こんな事を云つた。自分は不快を感じ、ペンの滅亡を困つた事に感じて、手ぶらで家に歸つて來た。尤も文房具屋へはいる度びにペン先きを一つづつ買つたので、いろ／＼のペンが十本ばかりたまつた。

そのダルマペンをフト今日も思ひ起し、一つ序でに神保町でも探さうと思つた。

目的の水道橋の本屋には、時折美術の古本が出るのである。それは當てなしに見たいと思つた。それから別に臙ろ氣に買ひたい古本の當があつた。それは英譯のミゼラブルと、かなり前に出た人見とか云ふ人のユーゴーの傳記と、それ等はもし遇然に見付ければ、買つてもいい。

自分はおりのりかへ切符を袂へ入れて又直きに使ふ氣で、先づ美術書のよくある東條本店へ行つて見た。途中で二軒文房具屋へはいつて見たがイモペンは無かつた。一軒の家では餘り店の女の人が箱を幾つもあけて探してくれるので氣の毒になつて、先きにかたまりコルタが付き、急に軸の細く軽さうになつてゐる安ペン軸を一つ買つた。

東條書店には目ほしいものは別に無かつた。

それから自分は一軒古本屋を出ては又隣りへはいり、又隣りへはいつて、間もなく神保町の角へ達した。自分はまだ水道橋へ行かうかと思つた。然し何か未練が残つてゐる。此の町に。まゝよと思つて、あすこの通りを横切つて了つた。反對側へ。そして又街つづきの古本屋通りを再び一軒一軒はいつて見た。何時か變な事を感じた。古本屋にも一軒々々に多少——或る家では特に目立つて——その店に獨特の感じは出てるし、並べ方にも、特に本の背に貼つてある紙、又は特にきれときれを指して和譯の表題を貼りつけたかに、非常に感じが出てゐると思つた。その主人の感じかと思つた。何しろ（此の街をあさる時にはいつもかられる例に依つて）異様な氣持にかられ、眼を光らして一軒々々に見た。

昔莊太と話したことがある。いつか一つ存分に使つていゝ金をいゝかけん持つて、一日が、りで神保町から本郷邊を歩いて見たい、と。恐らくかなり澤山に同志の人があるだらう。所で自分は今日ほもし「敵」に出逢へば、最高限五円は使つていゝとそこで思つた、——だがそれだけだぞ。無駄をするな。

さあ、面白くなつた。

自分は或る本屋でミゼラブルを見たが本が抄譯らしくて氣に入らなかつた。或る本屋でシニョル、カシオの二冊代表的なグレコを見た。然しそれは別に今ほしくなかつたし、前によく見たことがある。内容も抄譯で讀んでゐる。同じ本屋に、ルーベンスがあつた。それともう一つ何か(忘れたが)讀める書の本があつたが若し之れがテイントレットなら、買ふがと思つた。罪と罰やその他ドストエフスキーのものならば、かなり英譯のいゝ本で容易く揃ふと思つたが、僕の今探すミゼラブルばかりは變にない。イヤ今日に限つて無いのである。いつもは至るところよく見かけるのに。

豊島氏の譯で三巻まで、病氣中ねながら讀んだのである。四巻が出るのを待ち切れなくなつた。殊に市街戦がよみたくてよみたくてたまらない。——その立てこもるまで。要塞のアンジュー

ラ。ガブローシエ。マリユスに抱かれるエボニヌ。

醉漢グランテール……

それで英譯の成りたけ厚い、抜いてないのを、すぐ探したい。今あるといゝ。

それからいろんなものを見た。ストリンドベルヒのよさ相な評傳が目についた。或る本屋の本をおく方の棚に汚ない然したしかにいゝに違ひないマルクス、アウレリウスの冥想録(?)があつた。大きな厚い古い譯のトルストイ、人道主義があつた。非常に厚い活字の大きいシエークスピア全集があつた。或る本屋では新潮社のカラマゾフや何かゞズラリとみんな並んでゐるので欲しいと思つた。

至る所に僕の本があるので氣が引けた。レッシングの何かわづか十五錢ばかりであつたが獨逸語でがっかりした。先にラオコーンを見付けてつい買はなかつた事がある——その本屋をくまなく探したが影も無かつた。

李太郎の譯した十九世紀繪畫史を何れゆつくり讀まうと思つた。テーヌの英國文學史は何所かにないかと思つたが見付からなかつた。何か無性に欲しくなつた。之れでもし歸りまで何にもなければ今日は落付けないと自ら思つた。

或る本屋には經國美談と云ふ古めかしい黄色い變にくさい、活字のにじんだ本があつた。これは多分昔日本中の青年に讀まれ、彼等を亢奮させた本だと思ふ。アテネの歴史談があるらしい。一寸買つてやらうかと云ふ好奇心を起したが、人の名が漢字譯で讀めないものでやめた。同じ所に涙香の人耶鬼耶があり、經國美談によく似てゐる。いたづらに買つてやらうと思つたがきまりが悪いのでやめにした。

或る本屋には算術や三角、代數、幾何、なきの解説辭典が並んでゐた。工手學校へ行く弟に買つてやりたい氣を起したがまあやめた。厚い面白相なドンキホーテやガリゾー、グリム、アンデルセン、アラビアンナイトなども叢書らしく、並んでゐた。之れも弟の代りに見てゐる様に思ひ、いつか買つてそろへてやらうと思つた。四書五經とか孔子なきに關するいろ／＼の註釋すきの厚い漢書がぎつしり並んでゐる特殊な家があつた。新しき村の圖書館宛に之等をまとめて買つて送れたら氣がすむだらうなき出來心と思つた。

段々そんな氣持になり、疲れて來たが然し自分は何から何まで残らず見て了ひたい慾心から、のりかへは止めにして歩いて水道橋の方へまがつた。そこにも軒別に本屋がある。然し神保町をこつちへ鍵の手に折れて來ると、段ちがひに本屋の本は汚なくなり、安くなり、ひきく古く

なる。それに教科書類が多くなる。それで餘り丁寧には見なかつた。然し却つてこんな家にユーゴーの古い評傳はあるかも知れないと突差に思ひ、注意したが、ルーテルやエマソンはあつたがユーゴーはなかつた。一軒哀れな本屋に字引類に並んで僕のエル・グレゴがしよんほりあつたので、變な氣がした。

それで少し歩くのが三崎町あたりではイヤになつた。本にかなり無中になつたせひか、醫者にいぢられた奥齒の痛みはいつの間にか癒り、鈍重ないつもの病氣の感じしか感じなかつた。『自分は汗をふきながら歩き、家への土産にあの通りへ行くと必らず買ふアメのはいつたもなかを買つた。

それから水道橋を渡り、一體そこを目ざした筈の名は知らないが一軒の格のいゝ、古本屋へ達した。——一方ベンの方はもうその時分には飽き且つ忘れて、面倒にもなり、文房具屋があつても格別熱心に探す氣にはならなかつた。然し又道で二三軒聞いたことは聞いた、がまるで無い。「きうせないのだ。」流行おくれ。何故文房具なき日常の品まで、はやりすたりを追つて無闇に形ちを變へるのだらう。不都合に思ふ。

相不變最後の水道橋そばの家には中々いゝものが並んでゐる。豫ねてから欲しいと思ふ（然し

テキストは餘り感心しない)レオナルドの本もまだ賣れずにあるし、それから胸をおこらしたことは奇麗な原文のミゼラブルが四冊(?)並んでゐる、もしも少し佛語に明るければ買ふのだが——残念に思つた。所がその上に二冊わりに小さいが然し上下に分けた、ミゼラブル英譯がト見付かつた。メめたと思つた。

その本のとなりにラスキンのモダン、ペインター(抄譯)が一冊本で立つてゐた。それから下を見ると、いろいろ、書類が出てゐるそれに交ちつて色ずりの四五枚あるマンテナアも出てゐた。自分は迷つた。

そこには一體前から(誰れも目に付けぬと見えて彼之一年位あるだらう)「畫家、彫刻家、E T J」と云ふ中々いゝ一八七九年版の美術家人名辭書があるのである。只少し小さいくせに(然し七百頁)高く、それだけの特に買ふには金がいつも工合よくは餘らない。で、其儘いつも眺めてゐた。今日も又それがあつた。

僕は思つた。いつそ今日買つて了はう、と。それでゐねむりしてゐた小僧さんを起し、ミゼラブル二冊と辭書で幾らかと聞いて見た。彼は値を云つた。と同時に僕はラスキンとマンテナアも残しておきたくないと思つた。それもきいた。存外安かつた。「それでは之れとそれとこれ都合五

冊ではいくらだ」ときいた。僕が迷ふやうに彼も迷つてきもりながら値を云ひ、僕はそれをい、加減のかけ引きではしたを負けさせて、買ふことにした。——豫定より足が出た。「とうとうしよひ込んだ」がまあいゝ。

○

この文章は、それから家へ歸つて書いたのである。本屋を歩いた時には然し懐ろには金を足りるだけ持つてゐなかつたので、あとから家の者にとりによこすと約束して來た。僕が歸宅して二階の仕事場へ上ると入れかへに弟に場所を教へて本屋の買ひものを取りに行つて貰つた。弟は使ひから少し前に歸り、僕の買ひ込んだ五冊の古本は今書きもの机の端に積れて載つてゐる。

之れからそれ等をゆつくり見て、多分今夜はミゼラブルの先きを讀む。たのしみに。今日はかきかけの辭物は休みだ。

(大正八年七月十三日午後の稿を用ひ)

Faint, illegible text on the left page, possibly bleed-through from the reverse side.

遊
ぶ
會

Faint, illegible text on the right page, possibly bleed-through from the reverse side.

一、はじめ

或る冬の温和な日曜のことでした。主人のAの家に、「例」の會合があつて、午後二時頃のこと、畫家Bと主人が話してゐます。——まだ早いので、他の仲間はやつて來ません。客間の八疊のつきあたりに二人向き合つて座つて、間に丸火鉢をはさみ、明るい障子を横にしてゐるので、つちから見ると、何か影法師の様です。

障子の外には椽一杯に、日がさしてゐます。猫がそこに三匹互ひに重つて、ねてゐる。

A「……その君の買ったと云ふ芥子園畫傳は何だ、初版かね？」

B「まあ初版だ、と云ふんだが、それはさうだかわからない。然し何しろいゝ版だ。」

A「そりやいゝね。競賣に持つて來ればよかつたに。」

B「なあに、俺が入札するよ。」

A「……兎に角、傳統がしつかりして深いだけに、あゝなると型もいゝね。」

B「いゝ。——もう一つ舊體山水と云ふのがあるんだが、それは安版だ。然しさうして——」

A「知つてゐるよ、之れだらう。(さ出す)」

B「さうだ。(或る風景をあけて)。この綺麗さなきは、さすが支那だな。之れ位ゐる點を微妙に生かしたやり方は、類がないね。」

A「芥子園畫傳でも眞先きにあの樹の葉のつけ方に感心したよ。介字點とか菊花點、大混點、鼠足點……なきいろくあるが、實にうまい表現だな。繪の中の樹の葉、つまりあの象徴でいきなり「美」にしてふ直接なやり方だ。感心する。」

B「君は手習ひしたかい？」

A「イヤ——駄目だ。少しやつて見たがね、あの垂藤點なんて奴のゴツは、何所にあるんだかね。(間)、その山水畫帳の方で見るとイヤに自然にうまくはいつてゐるが、それを見て描いてもとても駄目だ、生きない。——つまりそれを發見した人の高さが何所となく素描に滲みてゐるんだね。」

B「型だけでもかなり年期が要るだらう。」

A「まあこつちは參考にするのだから——」

B 「見ればいゝさ。(聞)、見るだけでも何かしらん掘めるから。(A、うなづく)習字でもさうださうだ。或る人から聞いたが、草紙に習ふより手本を見て心書きと云ふのをやるんだ相だ。一字一字みつしりね。その方がぐんと手が上ると云ふ……」

A 「だが君それは、こつちが少しは相當に出来てからだね。(聞)、僕等が芥子園畫傳を見てやるやり方がつまり心書きだからな。描いても描かなくつても。」

B 「……それから誰だつけか、朝起きると毎日空へ大きく千字文をかうして(指さす)習つた相想だ。」

A 「感じがあるね。(空想する)それはたしかに爲めになる。」——然しもう誰か來さうなもの心付きました。

B 「おそいねえ。」

A 「うん。だがもう間もなく來るだらう。來出すと一時に來るんだが、——然しさうせみんな集まるのは日がくれてからだ。」

B は、俺も少し早いと家を出る時思つたのだ、と云ひました。

A 「まあ、ゆつくり話せていゝ。(聞)、君はその、芥子園畫傳を讀んだのかい？」

B 「イヤ、讀まない。」

A 「中々面白いが、(譯本を出す)之れだ。」

(B、開けて見る。A、のぞき込む)

B 「(讀む)鹿柴氏曰く、畫を論ずる、或いは繁を尙び、或いは簡を尙べきも、繁も非なり、簡も非なり……か。」

A 「法が無いのもいけないが有り過ぎるのは猶いけないと——云ふのがあるだらう。」

B 「サロンとアンデバンゲンだね。何時でもある……」

A 「僕は此の頃寧ろ法の有る方が無いよりいゝよ。さうせ有無以上に出つこない仕事は。——出鱈目より型の方がいゝ。」

B 「實際、近頃の日本畫はひぎいね。」

A 「ひぎい。勿體ない氣がするよ、全く。」

B 「この六法、六要、六長、なんか、さすが昔からの大道で面白いね。」

A 「三病と云ふのがあるだらう。一に曰く板、二に曰く刻、三に曰く結——つて言ふのが。」

B 「ある」

A 「板はつまり自然派、説明描寫だね。刻は形似とか象徴とか。手段味に拘んだ仕事のことだらう。——結は材料負けだ。(問)、まあその他いろいろと解出出来るが、僕は板はやらないが、刻、結、は時々いけないと思ふよ」

B 「意識があるからねえ。エロッキオだっけか、幾何學はあらゆる知識の母で同時に繪畫にも亦母だと云つてゐると思ふが、或る數理は、繪に本當だな」

此の時玄關に畫家 C の聲がして、彼は妻君と一緒に來ました。

C 「やあ、おくれたかね。オヤ、まだらしいな——」

彼は大きな貝を手にとって、二人の前におきました。「何んだか知つてゐるか?」

A 「蛤だらう」

B 「それは決つてゐるぢやないか。——あれだ。アメ細工のはいつた奴だらう」

C 「さうだ」

B 「僕も來がけにそこで見た」

C 「——すると君はつい少し前に來たのか」

B 「さあ、彼之れ一時間になるかな」

C 「あ、云ふ商人は一つ所に長くゐるのかね」

A 「屋臺を持つてゐるアメ屋か。此の(貝を指して)猫や桃太郎、棒にさしたひよつとこいなぎをこしらへてゐる、あれだらう?」

C 「さうだ。一つ所にゐるんだと賣れないから歩くだらうな」

A 「歩くだらう」

C 「大變だな。それはさうと、(貝を開ける)之れさ、(犬が輪に戯れてゐるアメ細工)實にうまいじやないか! (A、B、同意する)こしらへるのを一寸見てゐたのだが、つくづく感心した。

B 「いくらとるの?」

C 「それが實に安くて氣の毒な位だよ。——五錢。(問)之れが若しアメでなく、後に残るものぢつたら、之れで充分大したもんだぜ」

その犬は略がきの素描の感のある小さな「彫刻」で、藍と紅とが輪や首環に單彩してある。——その色も利いて、美術味充分です。

A 「あれだね」

(えん筒に吊るしたツケギ細工の屋根舟、燈籠など指す)

B 「さうだ。中々いゝ味のものが普通にあるね。」

C 「段々こんなものは無くなるだらうが、残念なことだ。」

A 「——僕は此の間或る木彫師に逢つたが、佛像を澤山持つてゐるK氏の家でだ。その木彫師はT齋と云ふんだがね、八十とかで、フェノロサや何かと方々歩いたこともあるらしい。——は、た、ち位頃の頃には之で中々天狗だつたが、今では……何とか、感じのある言葉で云つてゐたよ。」

(問) K氏が、さうくあなたのを手に入れたと云つて、T齋の三十代に作つた筆筒を奥から出して来て見せたが、竹筒に毛彫りで支那によくある文房具や花籠を彫りつけたものだ」

C 「作はさう？」

A 「中々いゝ。第一イヤ味がなく、丁寧で、所詮紛本味ではあるが、好意の持てるものだ。(問)

T齋がそれを見て、眼鏡をかけてね、反つて筆筒をかう手に持ちながらしきりに左見右見、よろしいなア、よろしいなア、と、云つてゐるのさ。これを作つた頃には丹念にコツコツ仕事する時分で、今はかう綿密に行かない。之れまでいゝ光澤になるものか……なき、變に愛情があつたよ。(問)、いくらで買つた、とT齋がK氏に聞くと、何でも道具屋が持つて来て、五十

円で買つたと云つた。安いなあとT齋がすぐ云つた。然し又すぐ、然しさう賣れてゐてまあありがたい。それからちよつと僕の顔も見てね、わしが手放したのは二円か三元——その位のものだ、と云つた……」

話は木版のこと、文樂のことなきに移りました。そして結局、木版彫りの老齢の人とか、珍らしいあり得る刷師、殊に文樂の人形師なきは、例へば時々音楽學校で一中節や説教節のその道の人と呼ばれる様に、もつとと呼ばれるか、又は學士會院あたりで保護するとか、そんな風にするのがいゝ、と話した。

C 「今はあゝ云ふ才藝で食ふ時代ではないのだから、無理だ」

A 「もう今からでは既にさう云ふ一藝の人は、探しても殆んど少ないかもしれないね。」

明治時代の混亂があつたからこそ、今も、亦之れからもあるのだが、——それは喜ぶ可き意味で、である——然し犠牲も非常に多い、と話す。

自然、それからは明治時代の文化のことに及んで、Aが此の頃買入れた泥繪を見せ「そつくりアンリ・ルーソーだな」とB、C共膝を進めて、感心しました。——この話の頃からAの兄甲次、乙造。甲次は妹文子と、乙造は妻君と、追々に集つて来て、にぎやかになりました。室は

温かく、煙くなる。女達は茶の間にかたまつてゐます。

B「が東京の建築のことから、近頃ニコライを見た話をしました。」

B「……あの鐘樓には鐘が七つ(?)だつけかあるが、真中に大きなのがあつて、まはりに小さいのが順に吊つてある。ド、レ、ミ、ファ……の音になつてゐるのだ相だ。で、振子から振子へそれぞれ綱が引いてあつて、その元を引くと例の、ガンランボン……が初まる仕掛けだ」
 あれは特にいろく式や何かにつれて鳴らし方があるのかね、と誰か聞きました。「ナニ、出鱈目でいつも綱さへ引けばあゝなるのだ相だ、あの音色にしか鳴らないのだ、とBが笑つて」
 「ところがその綱へ時々鳩が止つて、騒ぐことがある。それで時ならぬ時、鐘樓でベルの鳴る怪異があるとき。(間)、あのそばに昔からの信者が住んでゐる相だがね、或る時細君の御産で心配してゐると、真夜中に子供が生れた、その時不思議や(皆笑ふ)鐘が鳴つたんだ、ありがたがつた相だ！」

甲次「それはありがたかつたらう。」

B「イヤ、假令鳩と知つても、さうも俺でもそれは喜ぶだらうな。」
 文士林、元中學校教師深田等が來ました。

B「あの建物もいゝし、調度もニコライの好みで日本人が作つた相だが、中々いゝよ、殊に……あれは舶來かな——説教壇や、そのコマよせみたいなもの、戸の木彫り裝飾など、中々いゝ」
 C「虎の門味だらう？」

B「さうだ。何所か間の抜けた、美のはにかんだ初心な、可憐な、いゝ味だ。博物館の本館の戸の閉つた正面味——あの菊形の池もいゝね」

A「風情があるよ。(間)あの味がよく善意で噛みめられる時代なら、美は正道のわけだ。」

C「つまり中世式の古風なヨーロッパ型が、いきなり右から左りへ來たんだね。それを美へ噛み分けるよりも、——さう云ふ時期もあれで一寸あつたが、——差し當り忙しい文化では、——全く明治の或る感じは百科辭書だからな。——一足飛びに、淺い、上つ皮の、只當座役に立つ、簡単なモダーニズムへ牽かれた形らだ。——又無理もない。」

甲次「何しろ板垣死すとも自由は死せず、だからねえ。つい此の間が。」

乙造「過度の代表的過度だらう。(間)、だがよく過ぎて來た。」

(A、この間に小林清親や井上安次の東京名所版畫を持ち出す。偶々その中に、Aが北京で寫生したしん粉細工の人形の繪が出て來る。)

A「……見給へ。支那の丁度之れだ。(Cのアメ細工を手取る)このしん粉細工が。(寫生を指して)——當り前のことだが思へば不思議だね。之れは徹頭徹尾乾隆味と云ふか、何しろ清朝味だが、こつち(アメ細工)は又残らず徳川期味だ。」

B「年代に藝術があるともう、服装も持物、日用品、凡て貫くね。面白い。」

A「今の歐羅巴もさうだらう。殊に支那の女の服装、米國は問題外だが、日本の或る味も、一眼で無藝術、無美。すさまじい様だ。」

C「まあ見ろ。今にC式服装を起すから、(笑ふ)」

B「細君が仕立て、ね。」

A「皆で合名會社を起すかな。」

「ハハハハハ」

隣室から、

Cの妻「何を笑つてゐらつしやるの？」

A「Cが洋服屋になると云ふから。」

B「洋服ではない、和服だ。」

C(口をこがらせ)「國服創作協會だ。——ハハハハハ」

女連は然し「又初まつた」位る、とり合はずに、しきりに熱心に話しのつづきへ返るらしい……

Cの妻「それから如何して？」

乙造の妻「それからね、場面が變つて十位るのダニエルがピアノのある室でピアノにもたれて寂し相にしてゐるの。先の夫の子よ。すると隣りの室ではグレゴールが立つて、ルースが腰かけてね、拙い辯士で駄目なのよ。——何しろ、あのダニエルがそんなに可愛い、のかと云ふ様なことをルースに云ふの。」

C「皮肉？」

乙「まあさうでせう。しかし皮肉ばかりではないでせう。ルースは本當にダニエルが可愛い、のだからグレゴールは皮肉ではないわ。ルースがそれに寂しい面白くない様な顔をしてゐる。グレゴールは安つほい様な、意地わるの顔をしてゐるけれど、意地わるばかりではなく意地をよくしたつて、時々面白くないのだと思ふ。ルースを接吻するのよ。さうかして愛情をちやんと

したいと思ふらしいのね。然し、お前の唇は石の様だつてルースに云ふの。」

C「まあ。」

乙「ルースはイヤな顔をして、然し全く石の様かも知れないわ、黙てつツンと立つてゐる。ダレ
ゴールはムシヤクシヤして不愉快でイライラしてたまらないと見えるのね。一言二言云つて、
然し矢庭にルースの頬を平手で一つぶつの。」

C「ルースはさうして？」

乙「ルースは烈しくよけてそれからそばにあつた花瓶をいきなり手に持つてふり上げる」

文子「え？　ぶつんでせう」

乙「そこへエステルがはいつて来るのでその場はくぢける」

文子が、

「エステルつて何でしたつけ？」

乙「ルースの妹よ。……」

「おい！　何の話だ。」

と乙造が茶の間へ聲をかけました。

乙造の妻「クロイツェル・ソナタよ」

C「活動だらう？」

乙造「さうせ、活動だ」

妻「まあ」

男連「ハハハハハハ」

二、中ごろ

「こんにちは」と云つて金サンが來ました。Aの叔父で、本所小梅に上り屋をしてゐる。

「大分おにぎやかですな」

Aの妻「え、よくいらつしやいました」

金サンは苦勞人で、ちよくで、何んでも藝ごとは玄人なので、この會にはゐないと寂しいので
す。

殆んぎつゞいて従弟の大学生渡邊が来ました。友達を一人連れて来ました。が有名なダイギングの選手と云ふので、變に感嘆が起る。間もなく、Aの妻君の友達が二人来る。美術社展覧會の事務員大塚クンが来る。おくれて若い蕎かき、Dが来る。最後に——夕方になつて、Aの母が来ました。姉のところから子供が兄弟二人武雄、二郎だけ来た……

會場は茶の間の六疊と、客間の八疊二室で、もうわいわいとしてゐる。菓子があつて茶があつてふとんは足りるだけ、大ていチャムピオン達がしつかと敷いてゐる。猫がまごくしてうろついてゐます。

「此の黒猫をさけてくれ、氣味がわるい」

「あたしが抱きませう。まあ、眞黒だ」と女連に歓迎されてゐます。

エロキューションの得意な「通」の深田がかうなると、座談の花形です。

「……此の間×燕を聞いたが、まくらでかう云つたよ。何でも（身ぶり）私は話すのに客席の一人を目ざすのです。あとはまああつてもないと思ふことにしてゐる。で、その一人を泣かす。又は笑はす。それが思ふツボに行けば従つて客はみんな、泣きも笑ひも思ふまゝになる……」
若い蕎家D「講談は面白いねえ」

深田「面白い。殊に情がね。あの悪黨が送りになる時に（身ぶり）へえ、あつしや長年きはさ

く二度もかくれて食つて來ましたが、一度、天下晴れて、あれえ所を焼いて、一杯のみてえと思つてゐやす。……で、旦那方の御慈悲で一杯やるところなさは、又別だ」

D「あれい所つて何だい？」

B「なけえ、わらじ、みたいなもんだよ」

D「變なもんだな。何だい？」

深田「おいD君、此の土地に松杉を植へる、つて何だか知つてるか」

D「その位わかるさ。木だよ」

深田「それはお目出度いね」

D「正月だらう」

Dはブランダルチャンとチャンプルチャンがわからず、ルネッサンスが畫をかくと思つてゐる。著音器のレコードを手に持つて早くまはして、揚子を溝に當てたら簡單にうまく鳴る工夫はないか、——なま、此の頃はよく猫けないので平行してゐる」とハガキをよこしたことがあります。「描」に「閉口」……

D 「笑ふなよ。——講談は面白いよ、實際。此の間新聞で讀んだが或る劍術使ひが武者修行と試合ふところがあつた。試合に來た奴も中々うまいのだが劍術使ひのぢいさんの方がずつと上なんだ。それで、武者修行のかまへを見て、ウム、君は中々出来るが、只くせがある。自己流でやつたのだらう。そのくせ、がとれると今よりずつと上手になる、——と云ふところがあつた……」

C 「晝でもさうだな」

D 「(急いで) さうだ、さうだ。本當にさうだと思つたよ」

話が娯樂に移つて來ました。

甲次「人情話と云ふものはいゝもんだね。△の子別れを聞いたが、しまひに元のかみさんに子にひかされて逢ふところはよかつた、うなぎ屋の二階で逢ふのだが、亭主がもじくしてしきりに煙管に煙草をつめては吸はずにはたき、つめてはたきして、時々、おしきなさい、と元のかみさんに座ぶとんをすゝめるんだ。かみさんと視線がぶつかつてあはて、ニツと笑つて、ボンボン煙管をはたく。又、おしきなさい、と云つては笑つて目をそらす。——そのところが眞情だ」

乙造「甲兄さんはあゝ云ふものを聞いて、泣くかね」

甲次「つい泣くね。先にはきまりが悪くて、それに聞きすぎて批評心なきあつたし、泣かなかつたものだが、近頃はたまにきくせい、うまくやられると涙ぐむ」

乙造「僕も前の日曜に家中で淺草へ行つたんだがね。或る活動で、もう一步で男にだまされかけた或る細君がすんでのところ、非をさとののがあつた。その細君の親父がさう云ふ過ちがあつて子と夫を捨てた女の話をしてきかせ、その女は慈善病院でとう／＼悔いて死んだ。子を殘された夫は長年、苦勞して、娘を育てたが、——その娘が誰あらうお前だ、と初めて秘密を打ち明けるのだ。娘、つまり或る細君はすっかりそれで夢がさめる。(圓)、とそこへ會社から夫が歸つて來る。その夫が、又まぢめな男で、コツコツ毎日化學研究に没頭してゐるのだが、ネ、時には夫の會社の窓下へ子供と乳母だけ迎へに行つて、細君は家でよくない考へにふけるところなきある。氣の毒だよ。それが今日は、夫が歸つて來るともう、細君は矢庭にかけて迎へて、無くなしたものが見付かつた様な、まあ、役者もうまいのだらうが、右から、左から、手をとつたり、肩をさすつたり、狂喜の様に喜び、つゞけ様に接吻する。夫はあきれてボー然として了ふんだが、僕は涙が出た。——いきなりうれしかつたんだな、つまり。」

深田「泣けるのは又いゝものだよ。或る寄席で御詠歌の出た時に、四十位の女の人がそつと袖口

で涙をふいてゐたつけ。俺もそれでつい泣かされた」

「あゝ〜」と友達の大學生と向ふで話してゐた渡邊がその時一寸ふり向き、アザ笑つて、「イヤだね、通人は！」

吐く眞似をして見せました。——然し直ぐ又背を向けて、話し繼ぎの友人へ、「で、手はさうするんだつて、之れから……」

(左手をつき出し、右を引き、首をかゞめる。——變な形ち)

深田がそれを見て「何だい、そのかつかうは？ ハハア、泳ぎだな、相變らず」

渡邊「さうさ。クロールのターニングの研究中だ」

深田「この寒いのに」

渡邊「湯だよ。(聞)その、左りを向ふへつける、すぐかうわきの下へ(顔をかくして)もぐり、右でぐんとかいて、(友を見上げ)、このかく手と同時にうしろへ板を蹴るのか」(足を出し、殆んどまはる)

友人「その逆の方が出い、かも知れぬ。かう……(形ちを初める)」

深田「巢鴨だね、之れは」

一方では金サンが支那料理の話をしてゐます。室の一隅の床柱によつかゝり、林や大塚クン相手に……「無残なことをしますよ。鯉を一晚醬油の中に泳がせてね、さんざのむでせう、生身に味をつけるわけですあ。そいつをあくる日丸揚げにして食ふ。生きた奴をボン〜油で揚げるな、まだいゝ方です。(聞)、猿の脳味噌を食ふと云ひますがね。何でも臺を作つて上に板を當て、板に小さく丸穴があけてある。そこへ下から猿の脳天だけ當てがふ様に縛り付けるのだ相だ。で、食ふ奴がさじを持つてまはりに集まつて、一人が剃刀で猿の頭の毛を剃る。穴から出たところをでせうな。それから刃ものを脳骨へ突込んで、キリキリと丸く穴をあける。猿が泣くさうですよ。その脳天の穴へさじを入れて、脳味噌の湯氣の出る奴を、すくつて食ふと云ふのだが、……」

大塚「(漚面して)本當ですか」

金「さあ、そのところはまあ私も見たことではないのですがね。不老長壽の藥りと云ひますから、やりかねないね」

林「……支那料理と云へば、僕はこの間弱つたことがある。或る家へはいつて——名をまるで知らないんだがね、——蟹のを何でもくれと云つたんだ。すると間もなく深い井のが來た。早いナと思つて兎に角それを食つてゐると、——さあ、それが蟹だつたか何だか……何しろ又、ス

C 「成程、算術だね」(笑)

A 「ところがリヒテルと云ふ博士が、何しろ三十前後二年か三年、レオナルドがさうしてゐたかは、確かには誰にも分らない。——そのわからない期間を考證して、彼はその間に東方旅行をした。アルメニアにゐたし、シリアを通つてカイロのサルタンに機械技師となつたらう。猶、自ら進んで、回教思想をも奉じた、と書いた……」

B 「何からそんな説を立てられたのだ？」

A 「それが大變なんだ。レオナルド自身の、Codex Atl anticus に書いてあるのだ。(譯を讀む)——シリアのディオダリスよ。余は今アルメニアにゐる。貴君がのぞむところの仕事を果しに、此處にゐるのである。余の目論見に最もよく適ふ一地方に於て仕事を初める爲め、シヤレンデウラの町へ來て見た。此處は故國との境に接して、海岸にある。タウラス山のふもとである。云々——まだいくつもかう云ふ手記があるんだが、猶アルメニア地方一帯の地圖がかいてあるし、一四八三年に起つたアレツボの地震のことが記録してある。」

C 「さうかねえ。そんなに方々歩いたのかねえ」

A 「ところが又變なんだよ。——何でもその頃、一體文士の間、屢々普通のことをアレゴリー

で書いて本にする癖があつたんだな。よくあるルネッサン式風流だ。で、大てい手紙體で書いたものらしい。それと、ギルベルト・ゴギと云ふおおよそレオナルドの書きのこしたものなら何にでも通じてゐると云ふ大變な研究家が、リヒテルの一方にあつてね。リヒテルがレオナルド東方旅行説を云ひ立てると、もう泣かんばかりに、反對したと云ふのだ。のみならず、忽ちリヒテル式の他のいろいろの材料を、レオナルドの遺文から之れも同性質のものだ、之れも同じだと指摘して、うんと擧げたさうだ」

B 「さうかねえ。さすが本場の研究家だね」

A 「つまりリヒテルの材料でレオナルドが東方旅行をし、且回教信徒にもなつたと假りにして見ると、その他レオナルドは——まあ同じ當時だらうが、何處を歩き、何處迄出かけたか、餘程變なものになる。(問)、ゴギはそれで多分之れは、一體レオナルドは地理學や風土記類、旅行案内、地圖等が非常に好きである、偶々その頃又フロレンスやミランの人で、エヂプトやコンスタンティノープルあたり、或る者はアジア迄も、行つて歸つて來た者がある。それ等について、そこへレオナルド自身の想像を交へ、地圖もかくし、旅信も綴つたらう。「この巧みなる文章家が、それ故手紙體で小アジア地方の景致だとか同時代の書物によく出る地方のいろ／＼

のことを書いたからと云つて、少しも怪しむには當らないのである。「多分一冊その本をかゝうと思つて、然し中途でやめたらうと思はれる、と書いてゐる」

B「變だねえ、——妄想だね、殆んき」

A「その地圖や旅行記が又精確な、すばらしい、さうしても行つたとしか思へない位のものらしいんだ」

C「實にレオナルドだ！」

A「その他何かいろんなことがあるよ……」

いつか林や甲次、乙造、深田、……等もそこへ来て、聞いてゐる。

女連は長火鉢を中心に茶の間に丸くなつて、その真中に姉の子を入れ、順ぐりにつゞいて話をこしらへる遊びをしてゐる。

Cの妻「……するとその狐が實はその國の王様の化けたのでね」

武雄「王様に化けるのでせう」

Cの妻「さうさう、王様に化けてね。——それから？」

Aの妻「私？ 簡單ね。で、その化けた王様の御殿に王子が産まれました。ところがその王子が強い王子でね。此の國には昔から悪い狐があると云ふから、それを退治に行かう、と、王様にお願いするの」

二郎「あゝ、僕その話知つてらあ」

Aの妻の友「(微笑) それからさうするの？」

二郎「退治るんだよ」

武雄「だつて狐は王様に化けてるんだから、王様はお父様だらう、退治られないぢやないの」

Aの妻「そこをさうかして退治る様に之れからするの。次！」

電氣がバツとつきました。

Aの妻「オヤ、そろくかうしてもらえない。みんなすけて下さいね。(笑)、御飯にしませう」
で、茶の間にゐた男連はとなりへ引き上げ、女連はいろく、支度にかゝる様子です。ガタゴトしはじめ。

A「おい、此の間に競賣を初めていゝかね」

Aの妻（壘所で）「いつちへきいへる様にして下されば」

A「よし。——競賣を初めやう、競賣を」

みんなお互ひに、ゴソゴソ、持ち寄つた品物を用意する。

B「君は何だ？」

C「このアメ細工を出さう」

深田「そいつは僕がほしいな。大好きだ」

C「食ふなら賣らない」

Aが「僕がつけやう」と云ひました。「誰か札元にならないかな」

林「よし、僕がならう」

A「イヤ、僕はつけてゐられなかつた。之れから品物をまとめる役だ。大塚君、本職で一つ帳つけをたのみたい」

林「それから読み役が要るだらう」

渡邊「僕がならう」

で、机を持ち出して室の一端に据へ、その奥に林が座つてみんなは室の手前に陣さる。禿の大塚クンが半紙に筆で、帳つけをするのです。——その支度の中にAがみんなの持ちよつた品物を運んで、林の前後左右におき、机にきれをかけて、「客」から見えなくする。

札元「品物は残らずこゝにある。いゝかね。規則は、いくらでも最高價格に落札すること。本當に現金のこと。自分の出品には札を入れない。妥協あり、と。（机の下に手を入れてさぐつて）初めるよ、先づ之れからだ。山鳥の羽が一つ出る）いくら？」

（みんな思ひ／＼に紙片に値を書いて、読み役に渡す。札元も読み役もつけ役も入れる）

札元「すんだかね」

讀役「すんだ。讀むよ」

札元「まあ待つて。此の山鳥の羽はA夫人出品」

Aの弟「昨日食べたのこりだ」

D「うまかつたかい」叱！ 叱！

讀役「……いゝかね、五厘、D。五厘、林。五厘、深田。五厘、B……」

B「五厘ばかりだな」

讀役「いゝや、まだあるよ、ホラ、二錢、甲次。(喝采起る)五厘。乙造。買へず、と云ふのがあ
る。Cだ。それから、一錢、A。三錢、渡邊。(大喝采)五錢、大塚！」(どよめく)

札元(机を叩いて)「書記役！」(喝采)

書記役「イヤ、僕は初めて入れたので勝手にわからないのだよ。困るよ。そんなもの。高いよ」

A「本氣だな？」(大いに笑ふ)

札元「此度はこの靴！ 渡邊君出品」

深田「はけるかい？」

讀役「まあ裏を直せばはけるだらうが、直すのにさこの位かかるかな」

B「ヘンに本氣だな。買つてはく氣か」

深田「なあに。少くも靴だからさ」

D「一寸見せてくれ。俺は五錢位なら買ふぞ。(そつとぶるまげて見る)駄目だ、小さい」

讀役「九文だよ」

深田「それは誰にも駄目だらう！ 棄權、棄權」

札元は誰にはけるかがしたところが、甲次にやつと、Aの姉の子二人にはダブダブにはけま
す。

札元「ではその三人で入札すること」

結局それは、甲次が姉の子に妥協して一錢で武雄におちました。(武雄はこれをAの家へ忘れ
て行き、あとで屑屋が二十錢に買った。Aが「俺はそれから武雄と二郎に代りに本を送つてやつ
た。結局あの靴は、段ちがひで僕におちた形ちだ」——段々女連も仲間にはいつて来て、最後に
まとめて讀み上げた書記役のツケによると——

出品者	品物	價格	落札主	事故
Aの妻ノ	山鳥の羽ガ	五錢デ	大塚	(後出品取消)
渡邊ノ	靴ガ	一錢デ	武雄	(妥協)
文子ノ	懐中鏡ガ	七十錢デ	金さん	
Aノ	ゴオホ自畫像寫眞ガ	三十錢デ	渡邊	
甲次の	テーヌの English Literature ガ	五十錢デ	A	
Bノ	圖書館回数券入ガマロガ	二十錢デ	乙造	

乙造の	紺サーチ、チョッキガ	三十錢デ	甲次
大塚ノ	西洋剃刀ガ	十五錢デ	渡邊
Cの妻の	青九谷湯呑ガ	三圓一錢デ	B
Cの	アメ細工ガ	二十錢デ	深田
渡邊の友ノ	万年筆ガ	一圓デ	金さん
深田ノ	講談雜誌五冊ガ	五十錢デ	A
Aの弟の	コムパス、烏口ガ	三十錢デ	C
甲次の妻ノ	く、り猿五つガ	五十錢デ	文子

金サンは品物を忘れて来たので、「イヤ然し私はあの帽子をかけやう」とかぶつて来た帽子を出しましたが、それはみんな驚いて、中止になりました。

「さあ皆さん、こつちで御飯にしませう」

三、を は り

食後は、——誰云ふとなく、B夫人問題がいつか話題に上りました。深田が云つた。

「僕に第一氣に入らないのは何故夫人がD氏にちやんと底を割つて話をしなかつたか、間違つてゐると思ふよ……」

「それが夫婦ぢやないかいな」とそこで金サンが云つたので出鱈目になりかけましたが

「全くそれが夫婦だよ」と深田がイヤに念を入れて眞顔に云つたので、一種奇妙な空氣が起りました。

話はそれから段々につゞいて、結局、あれは事件の性質がよし止みがたい一つの勢ひで、或る必然でもあるにせよ、何しろ人生には日蔭のことで、秘さる可きもの、字義的に内部に語らるべきことである。それが露骨にあらはにわき起つた形ちは、さう云ふ時勢がフツと影に見えて、イヤな感じがする。ある新聞の騒ぎも不見識だが「新聞」はまあそれが商賣だから——それよりも第一、あの事件それ自身、辛い——同情すべき——恥や止むを得ぬ暗さの中でしめやかに——まぢめに——話される性質よりも、その性質は殆んど不問に通越して、寧ろ、いつそ初めから卑賤に新聞段々キか何かでわいわいはやされるに、さう云ひ切つては又氣の毒だが然し適當に、つまり「結末」が餘り粗製に先きへ出來てゐる。

事件の土臺がわるく、経過がいゝかけんで、自然終末がうはずつた淺はかな一空想に出来上つた。それが「出来上」れる程ひどい生活の空氣の中で。——まぢめに扱へる立場が少ない。D氏やY氏、T氏等が平凡だけに何だか却つて氣の毒に思はれる。尤も、事實そこ（男側）には私行やいきさつその他にカナリよくない、鼻もちならぬことはそれはあるだらう。夫人は何と云つても女だから一番氣の毒には違ひないが、その「氣の毒さ」（女）の實感があれではまるで下積みになつて、その上に浮いた無に劣る意識や思想ばかりはびこり、それは無雜作に（人ならある）恥や苦勞を曖昧にほかす役に立つ。その上で、猶變な風に凝つただけ、結局、相手の愚と殆んき色代りだけの相對になつた様では、仕方ないし淺ましい。行爲の對象とも動機ともなるものが餘りにさらにある仕様のない材料（實生活）だけのこと、——あゝでは、世の中に持ち出すも何にもなく、所詮段ごりの狂つたよくある一家騒動で「仕様がなない」以上にはさうも問題にならない。（さう云ふ生活は困つたものだが全く、困つたものだ。）偶々そこにあの絶縁狀の様な、氣の毒だが實際「特種」があるのは……

甲次「僕は女は文學なきには全く餘り立ち入らないのが、さうもいゝと思ふよ」

乙造「——だが然しあの立場の女の人や男は、世間に多いよ。いろ／＼刺戟を與へたらう。僕は不快な感じがした」

Cが「一體不快のほか與へない事件だよ。さうも明らかに道ならぬことがかなり平氣に、如何して肯定的に餘り大きな聲でしやべられる感じは、何しろたまらないからな」
まあたゞそれだけだ、さつちみち問題外——となりました。

A「何だかさうでもいゝ感じじやないか。戦争はなくならないだらう。美は有るだらう、だ。まあ、世の中もそれ自身次第に進むことはそれはたしかだと思ふが」

このぶつきら棒な發言が頭から出て、討議も考へもたじろいだ形ちです。林が「怖い感じがする」それは世の何が代表で麗々とあぶないことを相談してゐるのか、屢々腑におちないからだ、と云ひました。

乙造「あゝして軍艦だとか、要塞、砲臺……なきのことを露骨に勘定する立場に當つたら、全く心からそれこそ非戰論者にならずにはゐられまい。——が、さうしたらいゝものか。（聞）、まあ、僕は少くも、コツコツ歴史を調べたり、史實を考へたり、この自分の仕事で時も生活も充たすほかないだけだ……」

「よさうや！ マチメな話は。そんなことはいつでも出来る。(聞)、十云ふのをやらう、十云ふのを——と誰かゝあさぎ幕を切り落しました。何れもしらふで。」

「よし」

「三度目から云ふんだよ。(指で數へる用意をする) いゝか、——文豪——世界の文豪——世界の文豪！」

「ゲーテ」「文豪？」「シルレル」「文豪？」「ベートフェン」

「駄目だ！」

「此度は俺だ。いゝか——(考へて)、東京の橋。橋の名だよ。——橋の名、此度から！ 橋の名」「マ待つてくれ」

「橋の名、——橋の名」

「新橋」「橋の名」「京橋」「橋の名」「日本橋」「橋の名」「ホラ何とか云つた三越のそばの小さな

……今川橋」「變だな！ まあ橋の名」「辨慶橋」「橋の名」「四の橋」「橋の名」「三の橋」「橋の名」「二の橋」「橋の名」「一の橋」「橋の名」……あゝ、いけねえ」

「うまいところへ考へついて、やられたかと思つた。もう一度！ ——大臣、いゝか、大臣——大臣——」

「.....」

「ごうしたんだ？」

「更に駄目だ」

「誰か俺に東洋史の年代を聞け、東洋史の年代を！」

「よし、東洋史の年代、——年代——」

「先づ秦」「年代」「漢」「年代」「三國時代」「年代」「晋」「年代」「五胡十六國」「年代」「南北朝」「年代」「隋」「年代」「唐」「年代」「宋」「年代」「元！ その他と、如何だ」

「變な奴だな」

「シカサシゴナズトつてんだ！」

「キロキロとヘクト出かけたメートルがデシに見られてセンチ、ミリくつてのを知ってるか」
 「已出です已に半ば已は身の終りまで、に似たりだ」

「驚くな！ (唱ひ出す) 四道將軍五七三？ 天皇みづから熊襲を撃つは、七四二たけるの東征は、
 七五七西征七七〇、トコトツトト……。こゝで多分東征と西征と反對か何かなんだが忘れた。ま
 だあるぞ！ (唱ふ) たける死んだは七七三、國縣分つが七九五、神后征韓八六〇、らつこ自殺が
 九七二、トコトツトト……」

(一同あきれる)

「中學で試験勉強に作ったそのまゝだ、死ぬまで忘れさうもない……」

で、そろく此の會の大切狂言が初まるのです。

「魚、鳥、木、申すか。エ、おい！ 汝、魚鳥木を申すか？」

「申す」

「——魚！」

「タイ」

「うまい、うまい。此度は俺が云ふ」

「ウム……魚鳥木を申すか」

「——申す」

「鳥！」

「トリ」

「翻譯だな、ハハ」

「おい、汝魚鳥木獸を申すか」

「獸がはいるのか？」

「はいる。はいる。魚鳥木獸を申すか」

「申す」

「木」

「トラー！」

「なあんだ！」

こつちでは——

「さあ、考へたぞ！」

(問は八方より次第に起る)

「人か」「否」「抽象か」「否」「食へますか」「まあ、食へません、食へば食へるがね。(笑)」「固體か」「……の様だ」「流動體か」「の様でもある。——大體固體だが固體ばかりではないな」「此の室にあるか」「あるよ」「君は持つてゐるか」「持つてゐるだらう」「君ばかり持つてゐるのか」「いや、君もみんな持つてゐるな」「見えるか」「まあ見えないな」「いつでも見えないのか」「そんなことはないね」「そのもの、性質は——植物質かね」「さあ何だかな、(笑)動物質だらうと思ふ」「みんな持つてゐると云ふなら……形はふところへはいる程度ですか」「さうだよ」「入れられるかね」「入れ、ばはいります」「で、流動體ですか?」「大てい少しは流動體——だな」

「それがふところへはいつて外から形ちがわかるかね」「わからないな」「フム——非常に小さいものか」「非常に小さいと云へる」「醫學に關係のあるものだらう!」「ないと答へるほかないね」「では、病氣には?」「大いに關係ある場合がある」「駿河臺にその有名な病院があるだらう……」

イヤ、違ふかな」「違ふ。眼なら見えるよ」「成程、殆んど絶対に見えなかい?」「君上を向いて御らん。かすかに見えるかも知れないな」「上を向くと見えるのか」「みんな思ひくく上を向く」「バカな奴、ハハハ……」「大いに笑ふ)」

「何だ?」「降参かね(見まはす)」「イヤ待て。——上を向くと、つまり君に見えるのか」「さうだ、さうだ」「上を向いてくれ」「それは質問外だがまあ……」「(上を向く)」「ハハア、それは人體に附随したもので、血がかたまつてフタになつた小さなものだな」「のどのニキビか? 姑息なことを! もつと一般のもので、とり外し自由のものだ」「とり外し自由?」「うむ自由だ。君なごは……(云ひかけてやめる。笑)」

「兎に角人體に附随したものだね」「さうです」「人體の一部だね」「否」「何だ! 不要なものか」「まあさうだ」「(はやつて)腸の中にあるか」「(哄笑)そんなものが上を向いて見えるか!」「ふところへはいると云ふんだから違ふよ!」

「マア待て、近づいた、近づいた。ねえ、おい、近づいたらう」「餘り近くもないが……」「(夾然として)それは排泄物だね」「(おつかりする)さうだ」「鼻の中にあるね」「さうだ」「丸まるね」「参つたく!」

(上を向いた男)「バカな！」(鼻をかむ)

「君今度は鬼になれ、鬼に。かなり困らせたからな。困らせてやらう」
「よし」

(さ、彼は室外へ出て行く。あとの一同、彼に或る商賣をふり當て、決まったので呼び入れる)

「おいおい、もういゝ——云ふぜ」

(で、彼に一人々々はじからレントを興へ初める)

「君の商賣は東京に一軒しかないよ」

「變なものを考へたね、次ぎは？」

「その商賣をやつてゐると、ひと事ながら胸のすく場合もあり、赤氣の毒なこともある。いろいろだ。世の中はかうしたものかと思ふね」

「本當に？ フム。次ぎは」

「改良半紙を澤山使つてよ」

「半紙を？——わからないな。それから」

「君の商賣はまあ今の世になければならない、中々必要なものだが、殆んど人は知らないし、存

在を認めもしない位だ。所謂、椽の下の力持ちだな」

「で、俺は知つてゐるかね」

「知つてゐる。イヤ恐らく近頃になつて、おそらく日本中の人は一人のこらず——と云つていな、君の商品を、間接ながら飽きる位見たな」

「フム」

「毎日見た」——印刷屋の如しだ。(笑)「又文士の如く、殊にドラマティストだな(笑)」「製本屋でもあるだらう(笑)」「鉛筆の化けた様なものを使つてよ(笑)」「その東京に一軒しかない君の名はアサヒナと云ふのだ……」

「全くわからず、鬼は黙してゐる」

「——裁判所の豫審調書を謄寫する商賣だよ！」

鬼「あゝ！ 全くわからなかつた、参つた」

(鼻をさせられさうになる。さ、戸外に警鐘がきこへる。三つ番。)

「火事だな？」

「近いらしいぞ」——「何所だらう」

(鬼。急いで二階へ見に行く)

「オイ、あいつうまく逃げるつもりだよ」

「ハハ、——だがこんな寒い晩、焼け出されてはかなはないね。マ、こつちは大丈夫だらう」

「何かやらうぢやないか」

「何かやらう……」

それでも三四人、つゞいて二階へ見に所きました。が、火事位ではこの騒ぎはしばらく止み相にも思えません……

蛇足——會の由來、など

私達の間にはこんな會があるのです。他愛ないものですが、無邪氣で面白い。私はその事を思ふと好意を感じる。時にはもういゝかけん會がないかな、と思ひます。たしかクロボトキンの本に、何所か高原か何かで鳥が澤山勢揃ひをして、羽ばたきをし合ひ、互ひに啼き立て、「遊ぶ」事がある。と云ふのを讀んだことがあります。我々の會もその集まる意味では同じ事で、こゝに「同

じ事」と云へるのがまあ、——鳥より屢々アクの強いのが缺點で——會の綺麗な値うちでせう。それ故時には「必要」にもなる。

何をしやうと云ふのでもなく、「爲め」には何にもならないでせう。只、人と集まつて話したり遊んだりしたい、と思ふ、それは互ひに思ふ——そこに縁が起り、いつも續く基になる。仲間が寄り合つて遊ぶ。誰れ彼なく遊ぶ。雑談會とも云ふし茶話會ともいふ。「例の……」と云ふと「やらうかね」と云ふ事になつて、お互ひに一つのたのしみとなつてゐます。起りはもう古いことです。

——私には一體きようだいが澤山あるのです。尤も腹ちがひが多いのですが、この十年ばかり、それが互ひに散つてバラ／＼になつてゐました。本店がつぶれたので、澤山あつた支店もつぶれて、みんな四散しました。

例々その集まつた互ひに或る者は十年目、五年目、少くも三年目、二年目……の或る時の感じは、一種特別で、姉の前に弟は忽ち元の赤ん坊になり、又二十歳でも十位ゐる氣になる。弟の前には兄又は假令少しの違ひでも、その「違ひ」が然し弟は昔のチビのまゝ、自分だけいきなり現在まで年をとつた様な、變な氣がする。相手は知らぬうち立派な男になり、又は妻になり、——さ

うもお互ひに勝手がちがつて、餘程妙な工合でした。

「……いつがあれの三田のXXXかな？ 本郷の△△かな？ 廣小路の○○かな？」怪しげな感じもした事があります。

上を見ると「兄」も「姉」も何と不思議のない、親める、もう怒られるも段ちがひもない兄と姉だらう、懐しく感じる。と同時に下を見ると逆に壓迫を感じる。——まるで芝の家で泳げなかつた奴や、問題にしなかつた奴、あの這つてゐた赤子が、如何して堂々として今は洋服なき着てゐる。世帯のはなしをしたり、中には全く顔さへ知らなかつた當時生れたてのX町のおXさんが、高島田で現はれて来る。おかしいとも怪しいとも、その不思議な感じは異様で只例外なく、第一感が終る——すぐに、彼に對して何とも言へぬ、愛情を感じた。

年よつた母側のある人なごは、一人々々見る度びに涙を流す程でした。

「この寄り合ひはせめて年一度位の、イヤ月一度位るなければいけない。互ひにこんなになりつぱになつてゐるのに行き交はないのはつまらない——會を作らう、と云ふことに、しました。で、出來たのが「XXX會」と云ふのです。XXXはある弟の名をとりました。それはそのXXXがロンド

ンへ行くのではからず送別に何年ぶりにみんな逢つたのが會の動機だからですが、當のXXXが我々の中では、家の盛んな頃——その頃は各支店から我々みんなよく行き來した——一番赤坊ともつかず、子供ともつかぬ妙な年頃で、私なごは母に「XXXさんにかまつても頭にさはつたり倒したりしてはいけないよ。そんな事をするとおの子は脳病持だから目をまはす」と注意された。ヘンな奴だと思つて子供心に用心しながらからかつた——さう云ふコドモです。それが家がなくなつてからみんなちりぢりになつた、この十數年の間に、何所かで成人してこれから何しろ外國へ行かうと云ふ！ 我々の間には一種センセーションが起つたわけです。で、さう云ふ機會がなければ、もつと逢はずにちりぢりだつたかも知れません……

身うちの集まるのが本來は主意でした。ところが身うちは不思議で、十年散つてゐても、一日集まると融けて了ふ。XXX會の目的は、XXX會の「在る」ことで既に、逢けられました。

會は滞りなく進行しました。今の△△は成程十年前の△△ではなく、互ひに現在同志びつたりして来る。すると何もさうさうみうちの逢ふ必要は互ひになくなる。然し同時に、その時には既に一團の人間が集まつて話し合ひ、遊び合ふ面白さ、必然さ、——「XXX會」より只「會」の必要

が、いつとなく互ひに入用になつてゐた。殊に「我々」のうち或る者は、XX會がなくともさうせ
XX會で交友も記に共通してゐる。

「君、かう云ふ會が僕の家にあるのだがやつて来ないか」、ナニ、あれやあれが主だ、と氣樂に
友達を誘ふことが出来ます。目的は一夕わりに少くない人間が集まつて、しやべればいゝし、騒
げばいゝ、「遊」べばいゝ。私は殊に好きだ。遊ぶのは面白い。いろく特色のある人がゐる一團
になつて遊ぶ。一度遊ぶと、或る人の姉も叔母も従兄弟も、その人の家へ昔出入りした大工も、
隣りの人も、突然飛び入りの畫かきも、二度目には不思議でなくなる。それには只機會さへあれ
ばいゝ。遊ぶ才能や慾はみんな持ち合はす。

で、彼之れ今までに十度び近くあつたでせう。その中には、會のやり方が何となく決まり、特
色や面白さは素直になる。人はだんく範圍が擴まる。と同時に又時によつてつほまる。——つ
ほまる時にはつほまり方の感じが變る。で、何しろいつでも十人位る「人」が集まる。妹の家で
同胞はかり集まることがある。(すると字義的に我々には内輪のXX會で懐かしく、わるくない。)か
かと思ふと又は僕なきの家で、畫をかく友達の寄り合へ「畫かき」の存在も何も知らない「親類」
が飛び込む。(然し前からの三會ひで人同志よく知つてゐる。)さうかすると遠くの友達の家へ、ド

ヤドヤ「XX會」のおしかけることがある。

自由な、何しろさう云ふ「會」のあることが、我々の間——身うちの間、友達の間——に不思議
でない、且「面白い」消へない事實になりました。一XX會からクラブ的一種のものになつた。

「クラブ」と違ふのは、寄り合ひを何所かしら誰かの家で、いい様な順番にやる點です。移動ク
ラブです。で、決めも約束も目的も名簿もかゝりもない。漠としたところが、又何よりの長所だ。
いつ何所であるのかわからない。只、いつかしら何所でかにある。世にもいゝかけんの工合に
然しあるとするとバタバタと成立する。成立するグループの間に用意はいつでも出来てゐる。で、
二月に一度位る。——

「例の會を来る第X日曜に私の所でしたと思ふが、午後X時位るからにして、」——
夕飯を食ふから會費をいくら持つて来いとか、それだけ菓子を買つて来い、何か福引を持つて
来い、競賞品を持つて来い、……なき、主催者の勝手なことをかく。假裝をしたことも芝居をし
たこともある。ミゼラブルの市街戦を夜中にやつてから紙を一枚、ぶちぬいたことがあります。

——何しろさう云ふハガキが前觸れで、みんな仕事があるから日曜祭日にするこゝ、十日か半
月前に知らすこと、そのハガキへは受取つた人は參不參と出かける自分系の人数を知らすことだ

け、何となく定めになつてゐます。

——で、その寄り合ふ様を字にかくと計らず本文のやうに爲りましたが、之れを時間(事實)で云ふと、「一」のはじめがA時間として、「二」の中ごろが同じ位、と云ふより、人さへ揃へば、忽ちくだけていつでも「三」になるのです。その大切狂言の仕度が出来てゐる。来る、直ぐ。誰にも。でこの「三」のおはりになつてから實は會は之れからが愈々盛んで、その盛んさは、變化極まりなく、「書く」なきとも！ まあ大變なのです。不言實行……

ナニ、一口に云へば實は之れが恐らく會の主眼で、少くも大特色、多分正體は之れ一つで持つ會だ——だからたのしみで實に「遊ぶ會」、時々あるといふ、なと思ひます。本文のうちマチメな所は半分おまけで、之れでとうとうタネ明しまでして了ひました。阿々

(十一年二月號「中央公論」所載)

奉 天 小 觀

上

大正九年のことでした。

私はその七月十二日には、それまで一月の餘りた大連から離れて奉天の新市街S館に居所を移してゐました。で、奉天に着いた翌日（といふのが七月十二日のこと）私はM氏方の書生さんに案内されて初めて北陵を見物しました。

何でも朝早かつた様です。M氏の書生さんが馬車を持つて、私をS館へ誘ひに来てくれました。で、早速北陵見物に出かけたのですが、私は途中でナイフを忘れて来たのに氣が付きませんでした。それで一たん馬車をとめて、——たしか十間^{シヤチヤチヤン}房の先きでした——或る商店へナイフを買ひにはいりましたが、ろくな品がない。やつと角柄^{つが}の粗末な品を求めましたが、そんなたゞのナイフさへろくに雜貨店に備へてゐない様な、さう云ふ新開地のはづれへ段々道が進んだのでした。

案の定間もなく人家がまばらになつて、一望地形の凸凹とした荒地へ出ました。馬車のゆれること、ひざい。車上で話してゐながら會話の相手の手の様に「オット」とか「あぶない」とか、「イヤ

だな」「ひざいな」……と云ふ様なことを代り番に云ひます。ガクガク腰がゆれて走つて行くのです。聞けばその邊は一帶に墓地の由。日露戦争の時には彈丸の飛び交ふところださうです。かたまつた「奉天」の街は段々背後になるのです。稍暫らくさうしてゆれて、やつと北陵へつきましました。

——然しこの文は別に見物記のつもりではありません、もう見たものゝことはとり立て、かきません。此の奉天名所「北陵」のこともそれより他のことを主にかきませう。その北陵からは一時間ばかりして又引返した、と云ふ風に飛ばして。只、北陵は、野天の日の中をグラグラ馬車で来たのに、そこへ着いて見るとこんもり樹木があつて、それがさすがに水々しく、その濃緑の中に紅の圍ひの壁が先づ目に付く。如何にも「来たな！」と云ふ氣のすむ感じでした。ラムネ屋があつて早速ラムネをのみましたが、生ぬるくきつと腹に悪いだらうとあとで氣を病みました。——中には案内（か警護か）張作霖の兵隊がゐます。それがしきりについて来て金をくれと云ふので弱りました。しかし一寸それが又便利の様な、變な工合だつたのは、私が寫生帖を出して繪をかいとると「いけない」と云ふ。然し二十錢もやると黙許することです。たしかそれで北陵の「モデル後」を前賃に六十錢ばかり拂つた様です。呵々。支那旅行には、殊に寶物を見るとか繪をか

とか、寫眞、拓本、凡て變に賃銀が要るが又賃銀があるだけに、許可證とか何とかそんな面倒な手間よりはぢか談判ですむ便宜なところもあります——然しイヤな「便宜」です。自分の國ではありたくない。

一度は或る寺で——それは奉天ではなく北京で、したが——小坊主に例の金をやるのに合僧銅貨がない。さがすと五六枚——あの地では何にもならぬ——日本の銅貨だけ金入れにありました。で、それを渡したところが、恐らく小さいのでイヤな顔をしてゐる。且要らないと云ふのです。(もつとも有つても使へないから要らないでせう)。

するとわきからもう一人大人の坊主が出て来て、しきりにその金を見てゐましたが、刻印を指して「大日本」々々々と云つてゐる。大日本が氣に入つたらしい、寧ろ敬意(脅威?)を感じる模様です。が、それで結句通つたことがある。——こんなこともあつたと云ふ一つの餘計談です。

さて、私はそれから又元の道を馬車にゆられて奉天市内へ通り、車をS館(つまり新市街)へは向けず、舊市街へ向けて、向ふで云ふ「城内」へカバカバ乗り入れました。——それが私のあの支那舊都への入市式でしたが、さすが氣分が結束して見るもの何れも印象して止みません。

先づ城内入口には通りの左右に柱が立つて、それから空へ金もの細工のかけ橋を渡し、上に懸

が二匹向き合つて飾りに添へてあります。「双龍珠を争ふ」の實景です。實際龍と龍の中間に珠が有るからおかしい以上、本氣のことです。で、そのかけ橋(と云ふのは足りない字ですが、つまり門の上です)には四つ圓形牌が付いて、何とかいてあつたか忘れたが字が入れてある。とんと「新」「吉」「原」と云つた工合の何だか怪しげな感じですが。さう云ふ異風のところへ繰り込む感じがします。

それからは内部はずつと純支那市街で、初めは汚ない街だがやがて城内の内劃へはいると、ぐつと立派に、殷賑になる。内劃へはいる時支那には顯著な堂々と立つ城門を愈々くゞるので、そここの異趣、雜鬧、奇觀。全く Oh! Oh! と云ふ感じですが。さす黒く、高く、せまく、變にそびへた城門の壁へブリキの煙草のかんばんがベタに貼つてある。それがピンヘット、パイレットと云ふ昔東京で聞きおほへのある「香煙」の再現だから一層異觀です。さう云へば、この城内に内劃となる城門のところ迄汚ない鐵道馬車が通つてゐますが、その馬車は昔東京にあつた、あれだと云ふ事を人に聞きました。たしかに馬車や煙草のみならず、何年か前の「東京」があすこにはきつとあるのです。その文化の味なり、混亂、むき出しの道渡、いろんなものが。只進歩だけないかも知れません。

私はそこへはいつてからは、見るもの、聞くもの——と云へば支那語の騒音、断間なく通る手押しの車の哀音。その他むされる様です——珍らしくて、目を見張つてゐました。

それから宮殿を見て引返したのです。ここでは軍人の少尉位のがつか／＼と私に近よつて来て、「カネメグンデクダサイ」と云はれたのには、驚きすぎました。

宮殿の上から張將軍の家を見下ろしましたが、廣大な、すばらしいものです。——その頃張作霖の勢力は（今もさうでせう）大したもので、彼を祭つて神祠も出来てゐました。それと、何か城内は事あり氣で、彼の軍隊が各門にきびしく見張りをつけてゐました。私は一度城門の上へ登つて、誰可されましたが不安心なことでした。

翌十三日の記にうつりませう。

○

この日は有名なドロボー市を見ました。——此の名の起りは、何でもAならAが靴をとられた、と云ふ。すると、ではドロボー市へ行けと云ふので行つて見る。何所かしらにその盗まれた靴が出てゐる。と云ふ様なことなのです。その他ドロボーが此所に菓を食ふとも聞くし、一度はこんな話も聞いたことがある。朝早くその市へ行くと不意にすれちがふ支那人が袖の下にひすい

をかくしてゐて、通行人にチラと見せて値を踏ませると云ふのです。「此品用不用？」チヨイコヨリフヨイ「何來？」ドルチエン「一圓」コアイクエ「高、二十錢」アルシューカルスシンプン「如何」アマイ「不賣」マイ「い、ぢやないか」行、行（行、行）と云ふ様なことで、素早く安くひとるので、つまり盗品を。

そんなこともあるかも知れない。何しろ「ドロボー市」の名の通り、ユニツクな特別な感じがします。ゴタゴタの細い路次に兩側ともずらりと小商人が軒を並べてゐて、寧ろ軒で路次の蓋をしてゐて、門並古道具屋がある。食物屋がある。呉服屋がある。骨董屋がある。小間物屋がある。何屋がある……例へば淺草公園の仲見世へ砂をぶつかけて、ある品物は千住の町外れあたりのと入れ違へ、それから通り幅を兩側からぐんとくつつけた様な、然し通行人はあのまゝの様なゴタゴタなほこりだらけのところでは、それがする／＼何かはらわたの様に、つゞいてゐる。——面白いことは非常なものです。

そこへI氏に連れられて行つてラマ佛や毛布、陶器、人形、刺癩刀、箸入れ、木綿布なごしこたま、求めました。そのうち毛布は一寸模様が面白いので、いくら？ と聞いたところ十圓だと云ふ。二圓位なら買ふ、と云つて行きすぎたのに、あとから呼びとめてまげられました。實は厄介な背負ひこみでした。

それからイヤな感じがしたのは、ラマ佛を買つた或る家でそこに支那木版の版木が一枚出てゐます。いくらと聞くと五十錢だと云ふ。で、それを買ふことにして、しかしその前にラマ佛の金を拂ひに、私はガマロを開けました。連れの云ふにはその時中の二重になつた手前の方に、札のまるめたのが厚ほつたく見えた、と云ふのです。

何しろ、急に商人の態度が變つた。私はつゞいて今値を聞いた木板の金も拂はうとすると、「不賣」。五圓でなければ賣らない、とかう云ふ。

それからは連れがしきりに押し問答を(支那語で)しましたが、青服の商人は全く「口角泡を飛ばして」さうしても五十錢では賣れない。五圓でなければ賣らないと頑張ります。その露骨さにはあきれて引上げたことがある……

○

奉天へ來てから四日目になりました。

私はその日(七月十四日)には乙とつれ立つて白塔を見に行き、歸りに黄寺へまはり、午後には一人で——少しは此の地にも馴れましたから——昨日のドロボー市へ散歩に出かけました。

然し馴れたとは云へ一人歩きは危険で、それに街が何所もかも似てゐる。とうとう城内で道に

迷ひました。が、略讀者にもわからうと思ふ。此所へ入るには城門をくぐる。つまり城砦の中にある一劃で、町を何所かしらへまつすぐ歩けば區切りの城壁へ自然ぶつかります。それを、來た道と反對の方向へさし〜行へば何れは入口の城門へ右か左りの壁へぶつかる道理です。——私はそれを思ひ付き、實によくテクテク歩いて、とうとう思ひ通り迷路の外へ出ました。

が、さすが城門へ戻つた時にはホツとしました。私の様な若い、洋服姿の日本人などは或る所へ行くと、殆んど珍らしいのです。しかも車へのらぬ徒歩の者は。

「では何故車へのらなかつたのか？」

第一口が(その頃にはまだ丸で)きけないこと、もう一つの危険は支那苦力の車屋は乗りさへすれば、いゝかけんでも出鱈目でも殆んどかじの向く方へかけ出します。さうして變な所へ遠走りされては猶大變である。

……だが、私は此の迷ひ見の一人歩きの爲めに城内のいろ〜なことを見聞しました。石屋が門標の獅子頭を刻むのを暫く見物しましたが中々うまいものだと思ひました。又は芝居人形のシンコ細工を見ましたが、更に感心しました。節くれ立つた指頭でしかし奇用にシンコを丸めて、ブル々々々としぎつて美事なひけなきこしらへます。色ざりも形ちも中々いゝ。それから、門付

けに歌をうたふみすほらしい乞食を見ましたが、その歌の調子は生れて初めて聞く哀音で、何と異國にゐるだらう！ の旅情をしみじく味はひます。——只、困つたことは、子供がぞろぞろついで来ることでした。

「あつちへ行け」を知らなかつたのでとんと閉口しました。

下

此所にその地の支那公園で熊を見た——すつとあとの日のことを——記して、此の小観を結ぶことゝしませう。城内の外れに支那公園があるので。それはつまり日本人の公園とは別の意味で、支那人が遊ぶ別境に出来てゐます。

外がこいには上に市松模様なる煉瓦——と云つても灰色——の塀が廻つてゐて、一步園内へはいると、小みちのわきに大きなアンペラ圍ひがしてあります。「男客入此門」「女客入此門」と赤紙の貼札のしてある入口が出来てゐる。つまり、野天芝居です。

ところがそのアンペラ圍ひの中の騒がしさ。けたましさ。ドラを鳴らし、變な雑音を立て、

(それが下座の拍子で、今にもそこへ血だらけの人間何か飛び出して来さうな、すさまじい感じ)です。とても、そこへはいつて見る勇氣にはなれません。

その他小みちを先きの方へ行くと、圓形の廣場があつて、蓮池あり、亭を催く、と云ふ紋切型があります。しかしその蓮池の狭く、ガサガサで、殺風景なことは、蓮の葉がドブの中へ立てかけてある様なイラ立つ風致です。大變その葉がイヤ青く、大きい様に感じたが、向ふの氣候のせいか、それとも對照のせい。——その池の中に、張り出して朱塗りの亭が出来てゐるのです。さう、丁度、今上野の不忍池に出来てゐる何かの家、あゝ云ふ工合の小規模のもので、そこへは岸からは短かい橋がかゝつてゐる。

支那人がぞろ／＼その橋を渡つて、亭へ行つて休み、又歸つて來ます。そして入れ代り立ち代り賑はつてゐます。「風流」なことです。カンカン日にてらされてその邊はわるい印象派の繪の様に、ドギつい配色でむれてゐます。然しあの亭へ行つたら少しは涼しいかもしれない。少くも日影だから。それを只こつちから見れば、朱ぬりのガラクタ細工の小舎へ汚れた人間がまつてるばかりで、猶あつからうとも風情は毛程も感じません。

円形廣場の真中に又も催ふしものがあつて、それは大天幕を張つて中に一杯人が鈴なりにつま

つてゐました。——のぞくだけで養へ立つわきがの様な、顔をそむけずにはゐられぬ、濕氣、異臭がもう／＼としてゐます。中では目のすごい男がしきりに相方(三味の如きもの)を使つて歌がたりをやつてゐました。それが節と云ひ、タンカ(だらう)と云ひ、丸でそのまゝに日本の浪花節そつくりなので、變な氣がしました。「……忠次親分と板割の」と云ふ、全く、あの通りの聲なり節なり感じなりにきこへる趣きがあつて、不思議な氣さへしました。

私はさう云ふいろ／＼のものを見て、——小みちの影々にはキビか何かの食物を賣つてゐる店がある。その食ものには屋臺の上にある間、蠅がゴマをかけた様に、一杯たかつてゐます。又はくじを引いて何か當る體のいゝばくち、のみもの屋、種々——ブラ／＼圓形廣場をつつきりました。見るところ日本人では私だけです。

向ふのすみに又一團の人だかりがあります。何しろ、廣場は影がなくてチリチリ暑い。その人だかりの所へでもせめて一息つかないと、やり切れない温度です。(七月の半ばから殊に眞剣に暑さがましました)私は人だかりの所へ近寄りました。

で人垣をのぞいて中を見ると、上にはたしかよしづか何かの蔽ひが張られ、中はさく圍ひとなつて、地びたに二つ大きな眞黒なものがうごめいてゐます。よく見ると熊です。

熊は各々杭につながれて、右へ行つたり左へ行つたり、暑いのでせう、ハアハア息をきらして、時々周圍一杯の見物の方を向いてはおじぎをします。又は大きないち／＼をさく様な眞赤な口をあいて見せます。

一度は小さい方の熊が歩くのをやめ、後足で座つて、中腰になつて我々に腹を見せ(白い月の輪も見せ)、太つた兩手をだらりと双方に垂らして、その上で、二つ三つ御じぎをしました。何と、可愛いゝ、殊に無垢な眼であらう。心のそのまゝそこに光つた眼であらう。——私には、この熊の氣持が直接電氣の様に、わかつた氣がしました。否此の澤山にゐる人間との間でしかし私には人間の方のことは隔てがあつてわからずに、只、熊の思ひなり心だけむき出しにそこに在つてわかる氣がしました。痛く愛情を感じました。

人々はガヤガヤ笑ひながら何か云つてゐる。四方八方でガヤガヤはめいてゐます。しかし切角たのむ熊に何かやらうとする者は、ないので。——と、私の前にゐるた子供が、その子は手に竹ざゝを一本持つてゐる。それにしたゝか圍ひの中の砂をつけて、丁度正面の熊が又もこつちを向いて口を大きく開きました。その赤い口の中へ、いきなり砂だらけのさゝつ葉をガサガサと突込んだ。

熊は首を振つてそれから下を向いて了ひました。別に怒つた気色はない。下を向いて、それから細い目を横へキラリと光らせ靜かに前へ二三歩歩きました。がその姿勢で此度は後じさりしました……

私はそれを始終ぢつと見てゐたのです。動キがしながら見てゐたことを感じます。この時になつて、今一瞬の名状しがたい怒りと云ふか、悲哀と云ふか、それが目の前の熊の姿に悄然としてしかし明らかに現はれてゐるもの、その思ひの爲めに、亢奮を感じました。

あゝ、あの熊が痛々しくてたまらない。さうかしてやりたい衝動を感じるのですが熊が一人ぼつちの様に私も一人ぼつちで、さうしていゝか突差にはわからない。フト見ると、かたへの所にパン屋が一軒出てゐます。私はそこへ思ひ付いて、急いで出かけました。

が、言葉がわからない。——イライラして来て、私はさうともしろの氣で五十錢札を一枚そこにおき、パンを買ひたい意志を動作と顔で示したつもりです。パン屋はさすがわかつて、かなり大きな袋へパンを一杯、くれました。

私はそれをかゝへて熊の人だかりの所へ返つて来た。が、突差にきまりが悪くなりました。然し一方にそれを押しつける何か憤激に似た様な情がある。多分、かなり手荒でしたらう。その邊の

ボロボロの子供を押しつけて、さくの一歩前によつかりそれからあはてゝそゝくさとパンを一匹の熊の方へ、その口の届き相な邊へ、ぶちまけました。それからあと半分ばかり袋の分を少し遠いもう一匹の方へ、はうつてやりました。

それからあとをも見ずに殆んき逃げ出す氣であくせく歸つて来たのでしたが、……熊はたべたらうと思ふ。それとも支那人の見物の方がひろつて食つたか。何しろ變な奴だと思つたらうが、あの熊は只身にしてみても可哀相だつた。

私は今も思ひ出す。あのキラリと光る小さな熊の眼のことを。自分の支離滅裂な情緒のことを。ぐつすり汗をかいてあの公園を出た日のことを。

S 館へ歸つてから、暫く一人で思ひ出しては非常におかしくなつて笑つたり、又フツと寂しくなつて嘆息したりしました。

(以上、大正十一年四月三十日、稿了)

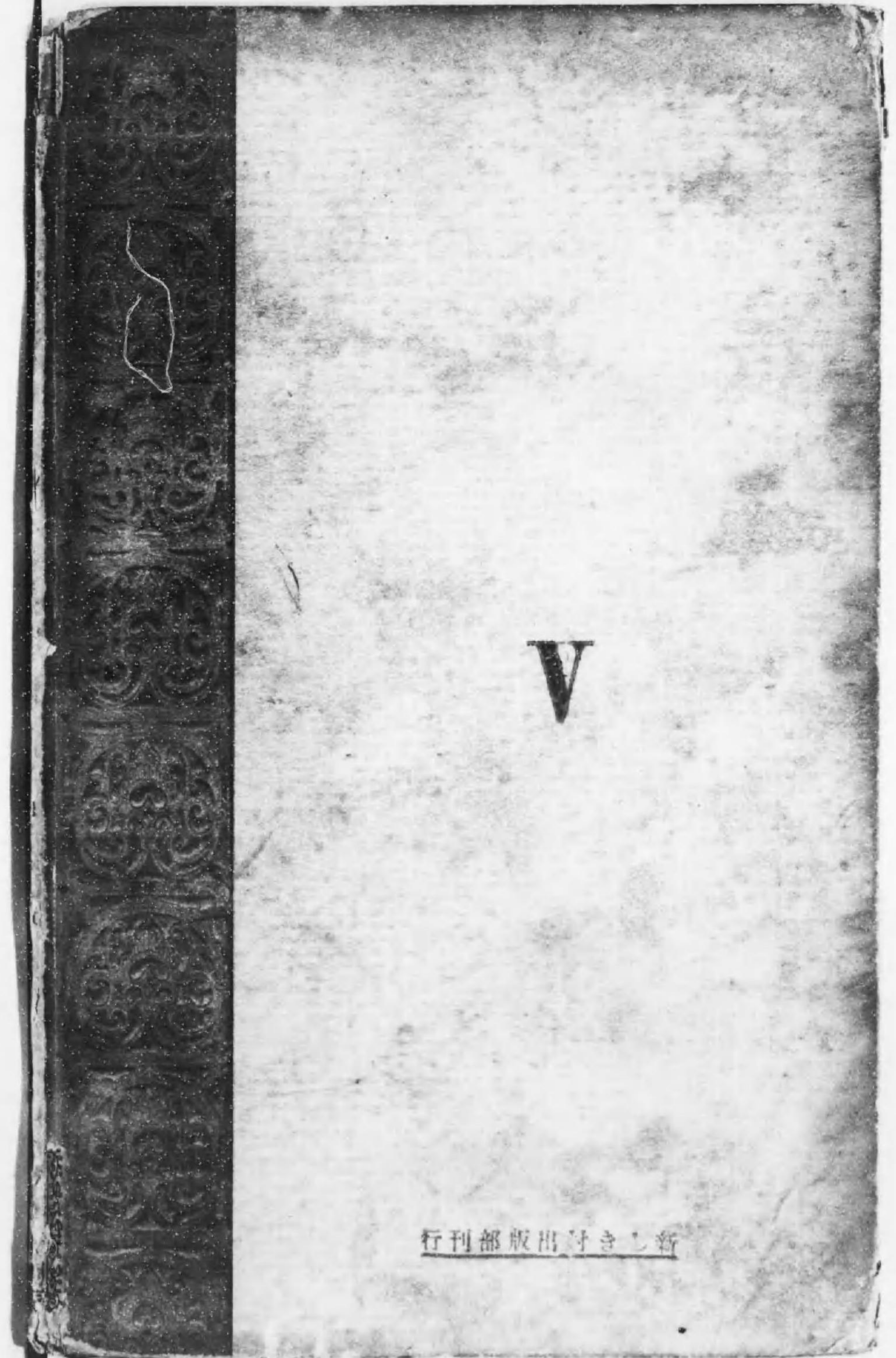
大正十三年四月廿日印刷
大正十三年四月廿五日發行
1-2,000
〔定價一圓〕

發 行 所	著 者	木 村 莊 八
	發 行 者	長 島 豐 太 郎
	印 刷 所	噴 野 社 印 刷 所

東京府北豊島郡長崎村一六二
新しき村出版部
電話小石川七〇九九

575
119

終



新しき出部刊行